

蟹工船

小林多喜二

—

「おい地獄さ行(え)ぐんだで！」

二人はデッキの手すりに寄りかかって、蝸牛(かたつむり)が背のびをしたように延びて、海を抱え込んでいる函館(はこだて)の街を見ていた。

- 漁夫は指元まで吸いつくした煙草(たばこ)を唾(つば)と一緒に捨てた。巻煙草(まきたばこ)はおどけたように色々にひっくりかえって、高い船腹(サイド)をすれずれに落ちて行った。彼は身体(からだ)一杯酒臭(くさ)かった。

赤い太鼓腹(たいこばら)を幅広く浮かばしている汽船や、積荷最中らしく海の中から片袖(かたそで)をグイと引張られてでもいるように、思いっ切り片側に傾いているのや、黄色い、太い煙

突、大きな鈴のような赤いヴイ、南京虫（なんきんむし）のように船と船の間をせわしく縫っているランチ、寒々とざわめいている油煙やパン屑（くず）や腐った果物の浮いている何か特別な織物のような波……。風の工合で、煙が波とすれずれになびいて、ムツとする石炭の匂いを送った。ウインチのガラガラという音が、時々波を伝って直接（じか）に響いてきた。

この蟹工船（かにこうせん）博光丸（はっこうまる）のすぐ手前に、ペンキの剥（は）げた帆船が、へさきの牛の鼻穴のようなところから錨（いかり）の鎖（くさり）を下していた。甲板を、マドロス・パイプをくわえた外人が二人同じところを何度も機械人形のように、行ったり来たりしているのが見えた。ロシアの船らしかった。たしかに日本の「蟹工船」に対する監視船だった。

「俺（おい）らもう一文も無（ね）え。糞（くそ）。こら。」

そうやって、身体をずらして寄こした。そしてもう一人の漁夫の手を振って、自分の腰のところへ持って行った。祥天（はんでん）の下のコールテンのズボンのポケットに押しあてた。何か小さい

箱らしかった。

一人は黙って、その漁夫の顔を見た。

「ヒヒヒヒ...」と笑って、「花札(はな)よ。」
といった。

ボート・デッキで、「將軍」のような恰好(かつこう)をした船長が、ブラブラしながら煙草をのんでいる。はき出す煙が鼻先からすぐ急角度に折れて、ちぎれ飛んだ。底に木を打った草履(ぞうり)をひきずって、食物バケツをさげた船員が急がしく「おもて」の船室を出入した。用意はすっかり出来て、もう出るにいいばかりになっていた。

雑夫(ざつふ)のいるハッチを上から覗(のぞ)きこむと、薄暗い船底の棚(たな)に、巢から顔だけピョコピョコ出す鳥のように騒ぎ廻っているのが見えた。皆十四、五の少年ばかりだった。

「お前は何処(どこ)だ。」

「××町。」みんな同じだった。函館の貧民窟(ひんみんくつ)の子供ばかりだった。そういうのは、それだけで一かたまりをなしていた。

「あっちの棚は？」

「南部。」

「それは？」

「秋田。」

それらは各々(おのおの)棚をちがえていた。

「秋田の何処だ。」

膿(うみ)のような鼻をたらした、眼のふちがあかべをしたようにただれているのが、

「北秋田だんし。」と聞いた。

「百姓か？」

「そんだし。」

空気がムンとして、何か果物でも腐ったすっぱい臭気(しゅうき)がしていた。漬物(つけもの)を何十樽(たる)も蔵(しま)ってある室(へや)がすぐ隣りだったので、「糞(くそ)」のような臭いも交っていた。

「こんだ親父(おど)抱いて寝てやるど」 漁夫がベラベラ笑った。

薄暗い隅(すみ)の方で、祥天(はんてん)を着、股引(ももひき)をはいた、風呂敷を三角にかぶった女出面(でめん)らしい母親が、林檎(りんご)の皮をむいて、棚に腹ん這(ば)いになっている子供に食わしてやっていた。子供の食うのを見ながら、自分では剥(む)いたぐるぐるの輪になった皮を食

っている。何かしゃべったり、子供のそばの小さい風呂敷包を何度も解いたり、直してやっていた。そういうのが七、八人もいた。誰も送って来てくれるもののいない内地から来た子供たちは、時々、そっちの方をぬすみ見るように、見ていた。

髪や身体がセメントの粉まみれになっている女が、キャラメルの箱から二粒(つぶ)ぐらいずつ、その附近の子供たちに分けてやりながら、

「うちの健吉と仲よく働いてやってくれよ、な。」といていた。木の根のように不恰好(ぶかっこう)に大きいザラザラした手だった。

子供に鼻をかんでやっているのや、手拭(てぬぐい)で顔をふいてやっているのや、ボソボソ何かいっているのや、あった。

「お前さんどこの子供は、身体はええべものな。」

母親同士だった。

「ん、まあ。」

「俺(おら)どこのア、とても弱いんだ。どうすべかって思うんだども、何(な)んしろ... ..」

「それア何処でも、ね。」

二人の漁夫がハッチから甲板(かんぱん)へ

顔を出すと、ホッとした。不機嫌(ふきげん)に、急にだまり合ったまま雑夫の穴より、もっと船首の、梯子形(はしごがた)の自分たちの「巣」に帰った。錨を(いかり)上げたり、下したりする度(たび)に、コンクリート・ミキサーの中に投げ込まれたように、皆は跳(は)ね上り、ぶっつかり合わなければならなかった。

薄暗い中で、漁夫は豚のようにゴロゴロしていた。それに豚小屋そっくりの、胸がすぐゲエと来そうな臭(にお)いがしていた。

「臭(く)せえ。臭せえ。」

「そよ、俺たちだもの。ええ加減(かげん)、こったら腐りかけた臭いでもすべよ。」

赤い臼(うす)のような頭をした漁夫が、一升瓶(びん)そのまま、酒を端(ふち)のかけた茶碗に注(つ)いで、賜(するめ)をムシャムシャやりながら飲んでいた。その横に仰向けにひっくり返って、林檎を食するめいながら、表紙のボロボロした講談雑誌を見ているのがいた。

四人輪になって飲んでいたのに、まだ飲み足りなかった一人が割り込んで行った。

「... ..んだべよ。四カ月も海の上だ。もう、こ

れんかやれねべと違って。 」

頑丈(がんじょう)な身体をしたのが、そういつて、厚い下唇(くちびる)を時々癖のように嘗(な)めながら眼を細めた。

「んで、財布(さいふ)これさ。 」

干柿(ほしがき)のようなべったりした薄い暮口(がまぐち)を眼の高さに振ってみせた。

あの白首(ごけ)、身体こったらに小せえくせに、とても上手(うめ)えがったどオ！」

「オイ、止(よ)せ、止せ！」

「ええ、ええ、やれやれ。 」

相手はへへへへと笑った。

「見れ、ほら、感心なもんだ。 ん？」

酔った眼をちょうど向い側の棚の下にすえて、顎(あご)で、「ん！」と一人がいった。

漁夫がその女房に金を渡しているところだった。

「見れ、見れ、なア！」

小さい箱の上に、皺(しわ)くちゃになった札や銀貨を並べて、二人でそれを数えていた。男は小さい手帖(てちょう)に鉛筆をなめなめ、何か書いていた。

「見れ。 ん！」

「俺にだって嬪(かかあ)や子供はいるんだで。」
自首(ごけ)のことを話した漁夫が急に怒ったように
にいった。

そこから少し離れた棚に、宿酔(ふつかよい)の
青ぶくれにムクんだ顔をした、頭の前だけを長く
した若い漁夫が、

「俺(おら)アもう今度こそア船さ来ねえって思っ
てただけれどもな。」と大声でいっていた。

「周旋屋(しゅうせんや)に引っ張り廻されて、文
無しになってよ。また、長げえことくたばる
めに合わされるんだ。」

こっちに背を見せている同じ処から来ているら
しい男が、それに何かヒソヒソいっていた。

ハッチの降口(おりぐち)に始め鎌足(かまあし)
を見せて、ゴロゴロする大きな昔風の信玄袋(し
んげんぶくろ)を担(にな)った男が、梯子(はしご)
を下りてきた。床に立ってキョロキョロ見廻して
いたが、空いているのを見付けると、棚に上って
きた。「今日は。」とあって、横の男に頭を下げ
た。顔が何かで染ったように、油じみて黒かった。

「仲間さ入(え)れて貰(もれ)えます。」

後で分ったことだが、この男は、船へ来るすぐ

前まで夕張(ゆうばり)炭坑に七年も坑夫をしていた。それがこの前のガス爆発で、危く死に損ねてから前に何度かあった事だが、ファイと坑夫が恐ろしくなり、炭山(やま)を下りてしまった。爆発の時、彼は同じ坑内にトロッコを押して働いていた。トロッコに一杯石炭を積んで、他の人の受持場まで押して行った時だった。彼は百のマグネシウムを瞬間眼の前でたかれたと思った。それと、そして1/500秒もちがわず、自分の身体が紙きれ片のように何処かへ飛び上がったと思った。何台というトロッコがガスの圧力で、眼の前を空のマッチ箱よりも軽くフッ飛んで行った。それッ切り分らなかった。どのぐらい経(た)ったか、自分のうなった声で眼が開いた。監督や工夫が爆発が他へ及ばないように、坑道に壁を作っていた。彼はその時壁の後から、助ければ助けることの出来る炭坑夫の一度聞いたら心に縫(ぬ)い込まれでもするように、決して忘れることの出来ない、救いを求める声を「ハッキリ」聞いた。彼は急に立ち上ると、気が狂ったように、

「駄目だ、駄目だ！」と皆の中に飛びこんで、叫び出した。(俺は前の時は、自分でその壁を作

ったことがあった。そのときは何んでもなかったのだが。)

「馬鹿野郎！　ここさ火でも移ってみる、大損だ。」

だが、だんだん声の低くなって行くのが分るではないか！　彼は何を思ったのか、手を振ったりわめいたりして、無茶苦茶に坑道を走り出した。何度ものめったり、坑木に額を打ちつけた。全身ドロと血まみれになった。途中、トロッコの枕木(まくらぎ)につまずいて、巴投(ともえな)げにでもされたように、レールの上にたたきつけられて、また気を失ってしまった。

その事を聞いていた若い漁夫は、

「さあ、ここだってそう大して変らないが...
...。」といった。

彼は坑夫独特な、まばゆいような、黄色ッぽく艶(つや)のない眼差(まなざし)を漁夫の上にじっと置いて、黙っていた。

秋田、青森、岩手から来た「百姓の漁夫」のうちでは、大きく安坐(あぐら)をかいて、両手をはすかいに股(また)に差しこんでムシツとしているのや、膝(ひざ)を抱えこんで柱によりかかりなが

ら、無心に皆が酒を飲んでいるのや、勝手にしゃべり合っているのに聞き入っているのがある。

朝暗いうちから畑に出て、それで食えないで、追払われてくる者たちだった。長男一人を残して

それでもまだ食えなかった　　女は工場の女工に、次男も三男も何処かへ出て働かなければならない。鍋(なべ)で豆をいるように、余った人間はドシドシ土地(くに)からハネ飛ばされて、市に流れ出てきた。彼らはみんな「金を残して」内地(くに)に帰ることを考えている。しかし働いてきて、一度陸を踏む、するとモチを踏みつけた小鳥のように、函館(はこだて)や小樽(おたる)でバタバタやる。そうすれば、まるッきり簡単に「生れた時」とちっとも変らない赤裸になっておっぼり出された。内地(くに)へ帰れなくなる。彼らは、身寄りのない雪の北海道で「越年(おつねん)」するため、自分の身体を手鼻ぐらいの値で「売らなければならない。」　　彼らはそれを何度繰りかえしても、出来の悪い子供のように、次の年にはまた平気で(?)同じことをやってのけた。

菓子折を背負った沖売の女や、薬屋、それに日用品を持った商人が入ってきた。真中の離島のよ

うに区切られている所に、それぞれの品物を広げた。皆は四方の棚の上下の寝床から身体を乗り出して、ひやかしたり、笑談(じょうだん)をいった。

「お菓子(がし)めえか、ええ、ねっちゃよ？」

「あッ、もっちょこい！」 沖売の女が頓狂(とんきよう)な声を出して、ハネ上った。「人の尻(しり)さ手やったりして、いけすかない、この男！」

菓子で口をモグモグさせていた男が、みんなの視線が自分に集ったことにテレて、ゲラゲラ笑った。

「この女子(あねこ)、可愛(めんこ)いな。」

便所から、片側の壁に片手をつきながら、危い足取りで帰ってきた酔払いが、通りすがりに、赤黒くプクンとしている女の頬(ほっ)ぺたをつつついた。

「何んだね。」

「怒(おこ)んなよ。 この女子(あねこ)ば抱いて寝てやるべよ。」

そういつて、女におどけた恰好(かっこう)をした。皆が笑った。

「おい饅頭(まんじゅう)、饅頭！」

ずウと隅の方から誰か大声で叫んだ。

「ハアイ」こんな処(ところ)ではめずらしい女のよく通る澄んだ声で返事をした。「幾(なん)ぼですか？」

「幾ぼ(なん)? 二つもあつたら不具(かたわ)だべよ。 お饅頭、お饅頭！」 - 急にワッと笑い声が起った。

「この前、竹田って男が、あの沖売の女は無理矢理に誰もいねえどこさ引っ張り込んで行ったんだとよ。 んだけ、面白いんでないか。 何んぼ、どうやっても駄目(だめ)だっというんだ」酔った若い男だった。「... ..猿又(さるまた)はいてるんだとよ。 竹田がいきなりそれを力一杯にさき取ってしまったんだども、まだ下にはいてるッていうんでねえか。 三枚もはいてたとよ。」男が頸(くび)を締めて笑い出した。

その男は冬の間はゴム会社の職工だった。春になり仕事が無くなると、カムサッカへ出稼(でかせ)ぎに出た。どっちの仕事も「季節労働」なので、(北海道の仕事は殆(ほと)んどそれだった。)イザ夜業となるとブツ続けに続けられた。「もう三年も生きれたら有難い。」といていた。粗製

ゴムのような死んだ色の膚をしていた。

漁夫の仲間には、北海道の奥地の開墾（かいこん）地や鉄道敷設（しせつ）の土工部屋へ「蛤（たこ）」に売られたことのあるものや、各地を食いつめた「渡り者」や、酒だけ飲めば何もかもなく、ただそれでいいものなどがいた。青森辺の善良な村長さんに選ばれてきた「何も知らない」「木の根ッこのように」正直な百姓もその中に交っている。そして、こういうてんでんばらばらのものらを集めることが、雇うものにとって、この上なく都合のいいことだった。（函館の労働組合は蟹工船、カムサッカ行の漁夫のなかに組織者を入れることに死物狂（しにものぐるい）いになっていた。青森、秋田の組合などとも連絡をとって、それを何より恐れていた。）

糊（のり）のついた真白い、上衣（うわぎ）の丈（たけ）の短い服を着た給仕（ボーイ）が、「とも」のサロンに、ビール、果物、洋酒のコップを持って、忙しく往き来していた。サロンには「会社のオツかない人、船長、監督（かんとく）、それにカムサッカで警備の任に当る駆逐艦（くちくかん）の御大（おんたい）、水上警察の署長さん、海員組合

の折靴(おりかばん)」がいた。

「畜生、ガブガブ飲むったら、ありゃしない。」

給仕はふくれかえっていた。

漁夫の「穴」に浜なすのような豆電気がついた。煙草の煙や人いきれで、空気が濁って、臭く、穴全体がそのまま「糞壺(くそつぼ)」だった。区切られた寢床にゴロゴロしている人間が、蛆虫(うじむし)のようになごめいて見えた。漁業監督を先頭に、船長、工場代表、雑夫長がハッチを下りて入って来た。船長は先のハネ上っている髭(ひげ)を気にして、始終ハンカチで上唇を撫(な)でつけた。通路には、林檎やバナナの皮、グジョグジョした高丈(たかじょう)、鞋(わらじ)、飯粒のこびりついている薄皮などが捨ててあった。流れのとまった泥溝(どぶ)だった。監督はじろりそれを見ながら、無遠慮に唾(つば)をはいた。

どれも飲んで来たらしく、顔を赤くしていた。

「ちょっと置いて置く。」監督が土方の棒頭(ぼうがしら)のように頑丈な身体で、片足を寢床の仕切りの上にかけて、楊子(ようじ)で口をモグモグさせながら、時々歯にはさまったものを、トットツと飛ばして、口を切った。

「分ってるものもあるだろうが、いうまでもなくこの蟹工船の事業は、ただ単にだ、一会社の儲(もう)け仕事と見るべきではなくて、国際上の一大問題なのだ。我々が - 我々日本帝国人民が偉いか、露助(ろすけ)が偉いか。一騎打ちの戦いなんだ。それにもし、もしもだ、そんな事は絶対にあるべきはずはないが、負けるようなことがあったら、鞆丸(きんたま)をブラ下げた日本男児は腹でも切って、カムサツカの海の中にブチ落ちることだ。身体が小さくたって、野呂間(のろま)な露助に負けてたまるもんじゃない。」

「それに、我カムサツカの漁業は蟹缶詰ばかりでなく、鮭(さけ)、鱒(ます)と共に、国際的にいってだ、他の国とは比べもならない優秀な地位を保っており、また日本国内の行き詰った人口問題、食料問題に対して重大な使命を持っているのだ。こんな事をしゃべったって、お前らには分りはしないだろうが、ともかくだ、日本帝国の大きな使命のために、俺たちは命を的に、北海の荒波をつッ切って行くのだということを知ってて貰わにゃならない。だからこそ、あっちへ行っても始終我帝国の軍艦が我々を守っていてくれることになっ

ているのだ それを今流行(はやり)の露助の真似をして、飛んでもないことをケシかけるものがあるとしたら、それこそ、取りも直さず日本帝国を売るものだ。こんな事は無いはずだが、よく覚えておいて貰うことにする。 」

監督は酔いざめのくさめを何度もした。

酔払った駆逐艦の御大(おんたい)はバネ仕掛の人形のようなギクシャクした足取りで待たしてあるランチに乗るために、タラップを下りて行った。水兵が上と下から、カントン袋に入れた石ころみたいな艦長を抱えて、殆(ほと)んど持てあましてしまった。手を振ったり足をまともふんばったり、勝手なことをわめく艦長のために、水兵は何度も真正面(まとも)から自分の顔に「唾(つば)」を吹きかけられた。

「表じゃ、何んとか、かんとか偉いことをいって、この態(ざま)なのだ。 」

艦長をのせてしまっ、一人がタラップのおどり場からロープを外しながら、ちらっと艦長の方を見て、低い声でいった。

「やっちまうか!?!.....」

二人はちょっと息をのんだ、が 声を合せて

笑い出した。

[二

祝津(しゅくつ)の灯台が、回転するたびにキラッキラッと光るのが、ずうと遠い右手に、一面灰色の海のような海霧(ガス)の中から見えた。それが他方へ廻転してゆくとき、何か神秘的に、長く、遠く白銀色の光茫(こうほう)を何涇(カイリ)もサッと引いた。

留萌(るもい)の沖あたりから、細かい、ジユクジユクした雨が降り出してきた。漁夫や雑夫(ざつふ)は蟹の鋏(はさみ)のようにかじかんだ手を時々はずかいに懐の中につっこんだり、口のあたりを両手で円(ま)るく囲んで、ハアーと息をかけたりにして働かなければならなかった。納豆の糸のような雨がしきりなしに、それと同じ色の不透明な海に降った。が、稚内(わかかない)に近くなるに従って、雨が粒々になって来、広い海の面が旗でもなびくように、うねりが出て来て、そしてまたそれが細かくせわしくなった。風がマストに当たると不吉に鳴った。鉾(びよう)がゆるみ

でもするように、ギイギイと船の何処かが、しきりなしにきしんだ。宗谷(そうや)海峡に入った時は、三千噸(トン)に近いこの船が、しゃっくりにでも取りつかれたようにギク、シャクし出した。何か素晴らしい力でグイと持ち上げられる。船が一瞬間宙に浮かぶ。

が、グウと元の位置に沈む。エレヴェターで下りる瞬間の、小便がもれそうになる、くすぐつたい不快さをその度に感じた。雑夫は黄色になえて、船酔らしく眼だけとんがらせて、ゲエ、ゲエしていた。

波のしぶきで曇った円(ま)るい舷窓(げんそう)から、ひよいひよいと樺太(からふと)の、雪のある山並の堅い線が見えた。しかしすぐそれはガラスの外へ、アルプスの氷山のようにはもりもりとむくれ上ってくる波に隠(か)くされてしまう。寒々とした深い谷が出来る。それが見る見る近付いてくると、窓のところへドッと打ち当り、砕けて、ザアー... ..と泡立つ。そして、そのまま後へ、後へ、窓をすべって、パノラマのように流れてゆく、船は時々子供がするように、身体を揺(ゆ)すった。棚からものが落ちる音や、ギーイと何かたわむ昔

や、波に横ッ腹がドブーンと打ち当る音がした。

その間中、機関室からは機関の音が色々な器具を伝って、直接(じか)に少しの震動を伴って、ドッ、ドッ、ドッ... ..と響いていた。時々波の背に乗ると、スクリュが空廻りをして、翼で水の表面をたたきつけた。

風は益々(ますます)強くなってくるばかりだった。二本のマストは釣竿(つりざお)のように、たわんで、ビュウビュウ泣き出した。波は丸太棒(まるたんぼう)の上まで一またぎするぐらいの無雑作(むぞうさ)で、船の片側から他の側へ暴力団のようにあばれ込んできて、流れ出て行った。その瞬間、出口がザアーと滝になった。

見る見るもり上った山の、恐ろしく大きな斜面へ玩具(おもちゃ)の船ほどに、ちょこんと横にのっかることがあった。と、船はのめったように、ドッ、ドッ、とその谷底へ落ちこんでゆく。今にも、沈む！ が、谷底にはすぐ別な波がむくむくと立ち上ってきて、ドシンと船の横腹と体当りをする。

オホツック海へ出ると、海の色がハッキリもっと灰色がかって来た。着物の上からゾクゾクと寒

さが刺し込んできて、雑夫は皆唇(くちびる)をブシ色にして仕事をした。寒くなればなるほど、塩のように乾いた、細かい雪がビュウ、ビュウ吹きつのはってきた。それは硝子(ガラス)の細かいカケラのように甲板に這いつくばって働いている雑夫や漁夫の顔や手に突きささった。波が一波甲板を洗って行った後は、すぐ凍えて、デラデラに滑(すべ)った。皆はデッキからデッキへロープを張り、それに各自がおしめのようにブラ下がり、作業をしなければならなかった。監督は鮭殺(さけころ)しの棍棒(こんぼう)をもって、大声で怒鳴り散らした。

同時に函館を出帆した他の蟹工船は、何時(いつ)の間にか離れ離れになってしまっていた。それでも思い切りアルプスの絶頂に乗り上がったとき、溺死者が両手を振っているように揺られに揺られている二本のマストだけが遠くに見えることがあった。煙草(たばこ)の煙ほどの煙が、波とすれずれに吹きちぎられて、飛んでいた。... ..波浪(はろう)と叫喚(きゅうかん)のなかから、確かにその船が鳴らしているらしい汽笛が、間を置いてヒュウ、ヒュウと聞えた。が、次の瞬間、こつちが

アブ、アブでもするように、谷底に転落して行った。

蟹工船には川崎船を八艘（そう）のせていた。船員も漁夫もそれを何千匹の鱻（ふか）のように、白い歯をむいてくる波にもぎ取られないように、縛りつけるために、自分らの命を「安々」と賭けなければならなかった。「貴様らの一人、二人が何んだ。川崎船一艘を取られてみる、たまったもんでないんだ。」監督は日本語でハッキリそういった。

カムサツカの海は、よくも来やがった、と待ちかまえていたように見えた。ガツ、ガツに飢えている獅子（しし）のように、えどみかかってきた。船はまるで兎（うさぎ）より、もつと弱々しかった。空言の吹雪は風の工合で、白い大きな旗がなびくように見えた。夜近くなってきた。しかし時化（しけ）は止みそうもなかった。

仕事が終わると、皆は「糞壺（くそつぼ）」の中へ順々に入り込んできた。手や足は大根のように冷えて、感覚なく身体についていた。皆は蚕（かいこ）のように、各々の棚の中に入ってしまうと、誰も一口も口をきくものがいなかった。ゴロリと

横になって、鉄の支柱につかまった。船は、背に食いついている蛇(あぶ)を追払う馬のように、身体をヤケに振っている。漁夫はあてのない視線を白ペンキが黄色に煤(すす)けた天井にやったり、殆(ほと)んど海の中に入りツ切りになっている青黒い円窓にやったり、中には、呆(ほう)けたようにキョトンと口を半開きにしているものもいた。誰も、何も考えていなかった。漠然とした不安な自覚が、皆を不機嫌にだまらせていた。

顔を仰向けにして、グイとウイスキーをラッパ飲みをしている。赤黒く濁(にご)った、にぶい電灯のなかでチラッと瓶(びん)の角(かど)が光ってみえた。ガラ、ガラッ、とウイスキーの空瓶(あきびん)が二、三カ所に稲妻形(いなずまがた)に打ち当たって、棚から通路にカ一杯に投げ出された。皆は頭だけをその方に向けて、眼で瓶を追った。隅の方で誰か怒った声を出した。時化にとぎれて、それが片言のように聞えた。

「日本を離れるんだど。」円窓を肱(ひじ)で拭(ぬぐ)っている。

「糞壺」のストーヴはブスブス燻(くすぶ)ってばかりいた。鮭や鱒と間違われて「冷蔵庫」へ投

げ込まれたように、その中で「生きている」人間はガタガタ顫(ふる)えていた。ズックで覆(おお)ったハッチの上をザア、ザアと波が大股(おおまた)に乗り越して行った。それが、その度に太鼓の内部みたいな「糞壺」の鉄壁に、物凄(ものすご)い反響を起した。時々漁夫の寝ているすぐ横が、グイと男の強い肩でつかれたように、ドシンとくる。今では、船は断末魔の鯨が、荒狂う波濤(はとう)の間に身体をのたうっている、そのままだった。

「飯だ」賄(まかない)がドアーから身体の上半分をつき出して、口で両手を囲んで叫んだ。「時化(しけ)てるから汁(しる)なし。」

「何んだって？」

「腐れ塩引(しおひき)！」顔をひっこめた。

思い、思い身体を起した。飯を食うことには、皆は囚人のような執念さを持っていた。ガツガツだった。

塩引の皿を安坐(あぐら)をかいた股(また)の間に置いて、湯気をふきながら、バラバラした熱い飯を頬ばると、舌の上でせわしく、あちこちへやった。「初めて」熱いものを鼻先にもってきたた

めに、水漬(みずばな)がしきりなしに下がって、ひょいと飯の中に落ちそうになった。

飯を食っていると、監督が入ってきた。

「いけホイドして、ガツガツまくらうな。仕事もろくに出来ない日に、飯は鱈腹(たらふく)食われてたまるもんか。」

ジロジロ棚の上下を見ながら、左肩だけを前の方へ揺(ゆす)って出て行った。

「一体あいつにあんな事をいう権利があるのか。」 船酔と過労で、ゲツソリやせた学生上りがブツブツいった。

「浅川ッたら蟹工の浅か、浅の蟹工かってな。」

「天皇陛下は雲の上にいるから、俺たちにヤどうでもいいんだけど、浅ってなれば、どっこいそうは行かないからな。」

別な方から、

「ケチケチすんねえ、何んだ、飯の一杯、二杯！なぐつてしまえ下唇を尖んがらした声だった。

「偉い偉い。そいつを浅の前でいえればなお偉い！」

皆は仕方なく、腹を立てたまま、笑ってしまった。

夜、よほど過ぎてから、雨合羽(あまがつば)を来た監督が、雑夫の寝ているところへ入ってきた。船の動揺を棚の枠(わく)につかまって支えながら、雑夫の間にカンテラを差しつけて歩いて南瓜(かぼちゃ)のようにゴロゴロしている頭を、無遠慮にグイグイと向き直して、カンテラで照してみていた。フンづけられたって、眼を覚ますはずがなかった。全部照し終ると、ちょっと立ち止まって舌打ちをした。 - どうしようか、そんな風だったが、すぐ次の賄(まかない)部屋の方へ歩き出した。未広な、青ッぼいカンテラの光が揺れる度に、ゴミゴミした棚の一部や、脛(すね)の長い防水ゴム靴や、支柱に懸けてあるドザや祥天(はんでん)、それに行李(こうり)などの一部分がチラ、チラッと光って、消えた。足元に光が整えながら一瞬間溜まると、今度は賄のドアーに幻灯のような円るい光の輪を写した。次の朝になって、雑夫の一人が行衛(ゆくえ)不明になったことが知れた。

皆は前の日の「無茶な仕事」を思い、「あれじゃ、波に浚(さら)われたんだ。」と思った。イヤな気持がした。しかし雑夫たちは未明から追い廻

されたので、そのことではお互に話すことが出来なかった。

「こったら冷(しゃ)ッこい水さ、誰が好き好んで飛び込むって 隠れてやがるんだ。見付けたら、畜生、夕夕きのめしてやるから 」

監督は棍棒(こんぼう)を玩具(おもちゃ)のようにグルグル廻しながら、船の中を探して歩いた。

時化は頂上を過ぎてはいた。それでも、船が行先きにもり上った波に突き入ると、「おもて」の甲板を、波は自分の敷居でもまたぐように何んの雑作(ぞうさ)もなく、乗り越してきた。一昼夜の闘争で、満身に痛手を負ったように、船は何処か跛(びっこ)な音をたてて進んでいた。薄い煙のような雲が、手が届きそうな上を、マストに打ち当たりながら、急角度を切って吹きとんで行った。小寒い雨がまだ止(や)んでいなかった。四囲にもりもりと波がムクレ上ってくると、海に射込む両足がハッキリ見えた。それは原始林の中に迷いこんで、雨に会うのよりももっと不気味だった。

麻のロープが鉄管でも振るようにバリ、バリに凍えている。学生上りが、すべる足元に気を配り

ながら、それにつかまって、デッキを渡ってゆくと、タラップの段々を一つ置きに片足で跳躍して上ってきた給仕に会った。

「チヨット」給仕が風の当らない角(すみ)に引張って行った。「面白いことがあるんだよ。」と行って、話してきかせた。

今朝の二時頃だった。ボート・デッキの上まで波が躍り上って、間を置いて、バジャバジャ、ザアツとそれが滝のように流れていた。夜の闇の中で、波が歯をムキ出すのが時々青白く光ってみえた。時化のために皆寝ずにいた。その時だった。

船長室に無電係が周章(あわ)ててかけ込んできた。

「船長、大変です。S・O・Sです！」

「S・O・S？ 何船だ？」

「秩父丸(ちちぶまる)です。本船と並んで進んでいたんです。」

「ボロ船だ、それア！」 浅川が雨合羽(あまがっぱ)を着たまま、隅(すみ)の方の椅子(いす)に大きく股を開いて、腰をかけていた。片方の靴の先だけを、小馬鹿にしたように、カタカタ動かしながら笑った。「もっとも、どの船だっ

て、ボロ船だな。」

「一刻といえないようです。」

「うん、それア大変だ。」

船長は舵機室に上るために、急いで、身仕度（みじたく）もせずにドアーを開けようとした。しかし、まだ開けないうちだった。

いきなり、浅川が船長の右肩をつかんだ。

「余計な寄道せって、誰が命令したんだ。」

誰が命令した？ 「船長」ではないか。 が、突嵯（とっさ）のことで、船長は棒杭（ぼうぐい）より、もっとキョトンとした。しかし、すぐ彼は自分の立場を取り戻した。

「船長としてだ。」

「船長としてだア ア？」

船長の前に立ち上がった監督が、尻上りの侮辱した調子で押えつけた。「おい、一体これア誰の船だんだ。会社が傭船（チアタア）してるんだで、金を払って。ものをいえるのア会社代表の須田（すだ）さんよこの俺だ。お前なんぞ、船長とってりゃ大きな顔してるが、糞場（くそば）の紙ぐれえの価値（ねうち）もねえんだど。分ってるか。

あんなのにかかわってみろ。一週間もフイにな

るんだ。冗談じゃない。一日でも遅れてみる！

それに秩父丸には勿体（もったい）ないほどの保険がつけてあるんだ。ボロ船だ、沈んだらかえって得するんだ。」

給仕は「今」恐ろしい喧嘩（けんか）が！ と思った。それが、それだけで済むはずがない。だが！（船長は咽喉（のど）へ綿でもつめられたように、立ちすくんでいるではないか。給仕はこんな場合の船長をかつて一度だって見たことがなかった。船長のいったことが通らない？ 馬鹿、そんな事が！ だが、それが起っている。給仕にはどうしても分らなかつた。

「人情味なんか柄（がら）でもなく持ち出して、国と国との大相撲（おおずもう）がとれるか！」唇を思いッ切りゆがめて唾（つば）をはいた。

無電室では受信機が時々小さい、青白い火花（スパアクル）を出して、しきりなしになっていた。とにかく経過を見るために、皆は無電室に行った。

「ね、こんなに打っているんです。だんだん早くなりますね。」

係は自分の肩越しに覗（のぞ）き込んでいる船長や監督に説明した。皆は色々な機械のスウィ

ッチやボタンの上を、係の指先が、あちこち器用にすべるのを、それに縫いつけられたように眼で追いながら、思わず肩を顎根(あごね)に力をこめて、じいっとしていた。

船の動揺の度に、腫物(はれもの)のように壁に取付けてある電灯が、明るくなったり暗くなったりした。横腹に思いッ切り打ち当る彼の音や、絶えずならしている不吉な警笛が、風の工合で遠くなったり、すぐ頭の上に近くなったり、鉄の扉を隔てて聞えていた。

ジイ　　、ジイ　　イと、長く尾を引いて、スパアクルが散った。と、そこで、ピタリ音がとまってしまった。それが、その瞬間、皆の胸へドキリときた。係は周章(あわ)てて、スイッチをひねったり、機械をせわしく動かしたりした。が、それッ切りだった。もう打ってこない。

係は身体をひねって、廻転椅子をぐるりとまわした。

「沈没です... ..」

頭から受信機を外しながら、そして低い声でいった。「乗組員四百二十五人。最後なり。救助される見込なし。S・O・S、S・O・S、これが二、三

度続いて、それで切れてしまいました。」

それを聞くと、船長は頸(くび)とカラアの間に手をつっこんで、息苦しそうに頭をゆすって、頸をのばすようにした。無意味な視線で、落着きなく四囲を見廻してから、ドアの方へ身体を向けてしまった。そして、ネクタイの結び目あたりを抑えた。その船長は見ていられなかった。

… … … … …

学生上りは、「ウム、そうか」といった。その話にひきつけられていた。しかし暗い気持がして海に眼をそらした。海はまだ大うねりにうねり返っていた。水平線が見る間に足の下になると思うと、二、三分もしないうちに、谷から狭ばめられた空を仰ぐように、下へ引きずりこまれていた。

「本当に沈没したかな。」独言(ひとりごと)が出る。気になって仕方がなかった。同じように、ボロ船に乗っている自分たちのことが頭にくる。

蟹工船はどれもボロ船だった。労働者が北オホツクの海で死ぬことなどは、丸ビルにいる重役には、どうでもいい事だった。資本主義がきまりきった所だけの利潤では行き詰り、金利が下

がって金がダブついてくると、「文字通り」どんな事でもするし、どんな所へでも、死物狂いで血路を求め出してくる。そこへもってきて、船一艘でマンマと何十万円が手に入る蟹工船、彼らの夢中になるのは無理がない。

蟹工船は「工船」（工場船）であって、「航船」ではない。だから航海法は適用されなかった。二十年間の間も繋（つな）ぎッ放しになって、沈没させることしかどうにもならないヨロヨロな「梅毒患者」のような船が、恥かしげもなく、上（うわ）べだけの濃化粧をほどこされて、函館へ廻ってきた。日露戦争で「名誉にも」ビッコにされ、魚のハラワタのように放って置かれた病院船や運送船が、幽霊よりも影のうすい姿を現わした。

少し蒸気を強くすると、パイプが破れて、吹いた。露国の監視船に追われて、スピードをかけると、（そんな時は何度もあった。）船のどの部分もメリメリ鳴って、今にもその一つ、一つがバラバラにほぐれそうだった。中風（ちゅうふう）患者のように身体をふるわした。

しかし、それでも全くかまわない。何故（なぜ）なら、日本帝国のためどんなものでも立ちあがる

べき「秋(とき)」だったから。 それに、蟹工船は純然たる「工場」だった。しかし工場法の適用もうけていない。それでこれぐらい都合のいい、勝手に出来るところはなかった。

利口な重役はこの仕事を「日本帝国のため」と結びつけてしまった。嘘(うそ)のような金が、そしてゴツソリ重役の懐(ふところ)に入ってくる。彼はしかしそれをモット確実なものにするために、「代議士」に出馬することを、自動車をドライブしながら考えている。 が、恐らく、それとカッキリ一分も違わない同じ時に、秩父丸の労働者が、何千哩(マイル)も離れた北の海で、割れた硝子屑(ガラスくず)のように鋭い波と風に向って死の戦いを戦っているのだ！

... .. 学生上りは「糞壺(くそつほ)」の方へ、タラップを下りながら考えていた。

「他人事(ひとごと)ではないぞ。」

「糞壺」の梯子(はしご)を下りると、すぐ突き当りに、誤字沢山(だくさん)で、

雑夫、宮口を発見せるものには、バット二つ手拭い一本を、賞与としてくれるべし。

浅川 監督

と、書いた紙が、糊（のり）代わりに使った飯粒（めしつぶ）のボコボコを見せて、貼（は）らさってあった。

三

霧雨が何日も上らない。それでボカされたカムサツカの沿線が、するすると八ツ目鰻（うなぎ）のように延びて見えた。

沖合四湊（カイリ）のところに、博光丸（はくこうまる）が錨（いかり）を下した。三湊までロシアの領海なので、それ以内に入ることは出来ない「ことになっていた」。

網さばきが終って、何時からでも蟹漁が出来るように準備が出来た。カムサツカの夜明けは二時頃なので、雑夫たちはすっかり身仕度をし、股（また）までのゴム靴をはいたまま、折箱の中に入って、ゴ口寝をした。

周旋屋（しゅうせんや）にだまされて、連れて来られた東京の学生上りは、こんな筈（はず）がな

かった、とブツブツいっていた。

「独り寝だなんて、ウマイ事いいやがって！」

「ちげえねえ、独り寝さ。ゴロ寝だもの。」

学生は十七、八人来ていた。六十円を前借りすることに決めて、汽車賃、宿料、毛布、布団、それに周旋料を取られて、結局船へ来たときには、一人七、八円の借金！)になっていた。それが始めて分ったとき、貨幣(かね)だと思って握っていたのが、枯葉であったより、もっと彼らはキョトンとしてしまった。始め、彼らは青鬼、赤鬼の中に取り巻かれた亡者(もうじゃ)のように、漁夫の中に一かたまりに固まっていた。

函館を出帆してから、四日目ころから、毎日のボロボロな飯と何時も同じ汁(しる)のために学生は皆身体の工合を悪くしてしまった。寝床に入ってから、膝(ひざ)を立てて、お互に脛(すね)を指で押していた。何度も繰(く)りかえして、その度に引っこんだとか、引っこまないとか、彼らの気持は瞬間明るくなったり、暗くなったりした。脛をなでてみると、弱い電気に触れるように、しびれるのが二、三人出てきた。棚の端から両足をブラ下げて、膝頭を手刀(てがたな)で打って、足

が飛び上るか、どうかを試した。それに悪いことには、「通じ」が四日も五日も無くなっていた。学生の一人が医者に通じ薬を貰いに行った。帰ってきた学生は、興奮から青い顔をしていた。

「そんなぜいたくな薬なんて無いとよ。」

「んだべ。船医なんてんなものよ。」側で聞いていた古い漁師がいった。

「何処の医者も同じだよ。俺のいたところの会社の医者もんだった。」坑山の漁夫だった。

皆がゴロゴロ横になっていたとき、監督が入ってきた。

「皆、寝たか　　ちょっと聞け。秩父丸（ちちぶまる）が沈没したっていう無電が入ったんだ。生死の詳しいことは分らないそうさ。」唇をゆがめて、唾（つば）をチエツとはいた。癖（くせ）だった。

学生は給仕からきいたことが、すぐ頭にきた。自分が現に手をかけて殺した四、五百人の労働者の生命のことを、平気な顔でいう。海に夕タキ込んでやっても足りない奴だ、と思った。皆はムクムク頭をあげた。急に、ザワザワお互に話し出した。浅川はそれだけいうと、左肩だけを前の方に

振って出て行った。

行衛(ゆくえ)の分らなかつた雑夫が、二日前にボイラーの側から出てきた所をつかまされた。二日隠れていたけれども、腹が減って、腹が減って、どうにも出来ず、出て来たのだった。捕んだのは中年過ぎの漁夫だった。若い漁夫がその漁夫をなぐりつけるといって、怒った。

「うるさい奴だ。煙草(たばこ)のみでもないのに、煙草の味が分るか。」バットを二個手に入れた漁夫はうまそうに飲んでいた。

雑夫は監督にシャツ一枚にされると、二つあるうちの一つの方の便所に押し込まれて、表から錠(じょう)を下ろされた。初め、皆は便所へ行くのを嫌(きら)った。隣りで泣きわめく声が、とても聞いていられなかった。二日目にはその声がかすれて、ヒエ、ヒエしていた。そして、そのわめきが間を置くようになった。その日の終り頃に、仕事を終った漁夫が、気掛りで直ぐ便所のところへ行つたが、もうドアを内側から叩きつける音もしていなかった。こっちから合図をしても、それが返ってこなかった。その遅く、峯隠(きんかく)しに片手をもたれかけて、便所紙の箱に

頭を入れ、うつぶせに倒れていた宮口が、出されてきた。唇の色が青インキをつけたように、ハッキリ死んでいた。

朝は寒かった。明るくなっはいたが、まだ三時だった。かじかんだ手を懐につっこみながら、背を円くして起き上ってきた。監督は雑夫や漁夫、水夫、火夫の室まで見廻(まわ)って歩いて、風邪(かぜ)をひいているものも、病気のものも、かまわず引きずり出した。

風は無かったが、甲板で仕事をしていると、手と足の先(さ)きが括粉木(すりこぎ)のように感覚が無くなった。雑夫長が大声で悪態(あくたい)をつきながら、十四、五人の雑夫を工場に追いこんでいた。彼の持っている竹の先には皮がついていた。それは工場で怠(なま)けているものを機械の棹越(わくご)しに、向う側でもなぐりつけることが出来るように、造られていた。

「昨夜(ゆうべ)出されたきりで、ものもいえない宮口を今朝からどうしても働かさなけアならないうって、さっき足で蹴(く)ってるんだよ。」

学生上りになじんでいる弱々しい身体(からだ)の雑夫が、雑夫長の顔を見い見い、そのことを知らせた。

「どうしても動かないんで、とうとうあきらめたらしいんだけど。」

そこへ、監督が身体をワクワクふるわせている雑夫を後からグイ、グイ突きながら、押して来た。寒い雨に濡れながら仕事をさせられたために、その雑夫は風邪をひき、それから肋膜炎(ろくまく)を悪くしていた。寒くないときでも、始終身体をふるわしていた。子供らしくない皺(しわ)を眉の間に刻んで、血の気のない薄い唇を妙にゆがめて、府のビリビリしているような眼差(まなぎ)しをしていた。彼が寒さに堪えられなくなって、ボイラーの室にウロウロしていたところを、見付けられたのだった。

出漁のために、川崎船をウインチから降ろしていた漁夫たちは、その二人を何もいえず、見送っていた。四十ぐらいの漁夫は、見ていられないという風に、顔をそむけると、イヤイヤをするように頭をゆるゆる二三度振った。

「風邪をひいてもらったり、不貞寝(ふてね)をされてもらったりするために、高い金払って連れて来たんじゃないんだぜ。馬鹿野郎、余計なものを見なくたっていい！」

監督が甲板を棍棒（こんぼう）で叩いた。

「監獄（かんごく）だって、これより悪かったら、お目にかからないで」

「こんなこと内地（くに）さ帰って、なんぼ話したって本当にしねんだ。」

「んさ。こったら事って第一あるか。」

スティムでウィンチがガラガラ廻り出した。川崎船は身体を空にゆすりながら、一斉に降り始めた。水夫や火夫も狩り立てられて、甲板のすべる足元に気を配りながら、走り廻っていた。それらのなかを監督は鶏冠（とさか）を立てた牡鶏（おんどり）のように見廻った。

仕事の切れ目が出来たので、学生上りがちょっとした間、風を避けて、荷物のかげに腰を下していると、炭山（やま）から来た漁夫が口のまわりに両手を円るく囲んで、ハア、ハア息をかけながら、ひょいと角（かど）を曲ってきた。

「生命的（えのちまど）だな！」それが心からフイと出た実感が思わず学生の胸を衝いた。

「やっぱり炭山（やま）と変らないで。死ぬ思いぼしないと、生（え）きられないなんてな。瓦斯（ガス）も恐ッかねど、波もおっかねしな。」

昼過ぎから、空の様子がどこか変ってきた。薄い海霧(ガス)が一面に　　しかしそうでないといわれれば、そうとも思われるほど、淡くかかった。波は風呂敷(ふるしき)でもつまみ上げたように、無数に三角形に騒ぎ立った。風が急にマストを鳴らして吹いて行った。荷物にかけてあるズックの覆いの裾がバタバタとデッキをたたいた。

「兎(うさぎ)が飛ぶどオ　- 兎が！」誰か大声で叫んで、右舷のデッキを走って行った。その声が強い風にすぐちぎり取られて、意味のない叫び声のように聞えた。

もう海一面、三角波の頂きが白いしぶきを飛ばして、無数の兎があたかも大平原を飛び上っているようだった。それがカムサッカの「突風」の前ブレだった。にわかに底潮の流れが早くなってくる。船が横に身体をずらし始めた。今まで右舷(うげん)に見えていたカムサッカが、分らないうちに左舷(さげん)になっていた。- 艘(そう)に居残って仕事をしていた漁夫や水夫は周章(あわ)て出した。

すぐ頭の上で、警笛が鳴り出した。皆は立ち止ったまま、空を仰いだ。すぐ下にいるせいか、斜

め後に突き出ている、思わないほど太い、湯桶（ゆおけ）のような煙突が、ユキユキと揺れていた。その煙突の腹の独逸（ドイツ）帽のようなホイッスルから鳴る警笛が、荒れ狂っている暴風の中で、何か悲壮に聞えた。遠く本船を離れて、漁に出ている川崎船が絶え間なく鳴らされているこの警笛を頼りに、時化（しけ）をおかして帰ってくるのだった。薄暗い機関室への降り口で、漁夫と水夫が固まりあって騒いでいた。斜め上から船の動揺の度に、チラチラ薄い光の束が洩（も）れていた。興奮した漁夫の色々な顔が、瞬間瞬間、浮き出て、消えた。

「どうした？」坑夫がその中に入り込んだ。

「浅川の野郎ば、なぐり殺すんだ。」殺気だっていた。監督は実は今朝早く、本船から十哩ほど離れたところに碇（とま）っていた××丸から「突風」の警戒報を受取っていた。それにはもし川崎船が出ていたら、至急呼戻すようにさえ付け加えていた。その時、「こんな事に一々ビク、ビクしていたら、このカムサッカまでワザワザ来て仕事なんか出来るかい。」そう浅川のいったことが、無線係から洩（も）れた。

それを聞いた最初の漁夫は、無線係が浅川でもあるように、怒鳴りつけた。「人間の命を何(な)んだって思ってやがるんだ！」

「人間の命？」

「そうよ。」

「ところが、浅川はお前たちをどだい人間だなんて思ってないよ。」

何かいおうとした漁夫は吃(ども)ってしまった。彼は真赤になった。そして皆のところへかけ込んできたのだった。

皆は暗い顔に、しかし、争われず底からジリジリ来る興奮をうかべて、立ちつくしていた。父親が川崎船で出ている雑夫が、雑夫たちの集っている輪の外をオドオドしていた。ステイが絶え間なしに鳴っていた。頭の上で鳴るそれを聞いていると、漁夫の心はギリ、ギリと切り苛(さ)いなまれた。

夕方近く、ブリッジから大きな叫声(さけびごえ)が起った。下にいた着たちはタラップの段を二つ置きぐらいにかけ上った。 - 川崎船が二艘(そう)近づいてきたのだった。二艘はお互にロープを渡して結び合っていた。

それは間近に来ていた。しかし大きな波は、川崎船と本船を、ガタンコの両端にのせたように、交互に激しく揺り上げたり、揺り下げたりした。次ぎ、次ぎと、二つの間に彼の大きなうねりがもり上ってローリングした。眼の前にいて、仲々近付かない。歯がゆかった。甲板からはロープが投げられた。が、とどかなかった。それは無駄なしぶきを散らして、海へ落ちた。そしてロープは海蛇のように、たぐり寄せられた。それが何度もくり返えされた。こつちからは皆声をそろえて呼んだ。が、それには答えなかった。漁夫の顔の表情はマスクのように化石して、動かない。眼も何かを見た瞬間、そのまま硬わばったように動かない。その情景は、漁夫たちの胸を、眼のあたり見ていられない凄(すご)さで、えぐり刻んだ。またロープが投げられた。始めゼンマイ形にそれから鰻(うなぎ)のようにロープの先きがのびたかと思うとその端が、それを捕えようと両手をあげている漁夫の首根を、横なぐりにたたきつけた。皆は「アッ！」と叫んだ。漁夫はいきなり、そのままの恰好(かっこう)で横倒しにされた。が、つかんだ！ロープはギリギリとし

まると、水のしたたりをしぼり落して、一直線に張った。こっちで見ていた漁夫たちは思わず肩から力を抜いた。

シテイは絶え間なく、風の工合で、高くなったり、遠くなったり鳴っていた。夕方になるまでに二艘を残して、それでも全部帰ってくる事が出来た。どの漁夫も本船のデッキを踏むと、それっきり気を失いかけた。一艘は水船になってしまったために、錨(いかり)を投げ込んで、漁夫が別の川崎に移って、帰ってきた。他の一艘は漁夫ともに全然行衛不明だった。

監督はプリプリしていた。何度も漁夫の室へ降りて来て、また上って行った。皆は焼き殺すような憎悪に満ちた視線で、だまって、その度に見送った。

翌日、川崎の搜索かたがた、蟹の後を追って、本船が移動することになった。「人間の五、六匹、何んでもないけれども、川崎がいたましかった」からだった。

朝早くから、機関部が急がしかった。錨を上げる震動が、錨室と背中合せになっている漁夫を煎豆のようにハネ飛ばした。サイドの鉄板がボロボ

口になって、その度にこぼれ落ちた。博光丸は北緯五十一度五分の所まで、錨をなげてきた第一号川崎船を捜した。結氷（けっぴょう）の碎片（かけら）が生きものののように、ゆるい彼のうねりの間々に、ひょいひょい身体（からだ）を見せて流れていた。が、所々、その砕（くだ）けた氷が見限りの大きな集団をなして、あぶくを出しながら、船を見る見るうちに真中に取囲んでしまう、そんなことがあった。氷は湯気のような水蒸気をたてていた。と、扇風機にでも吹かれるように「寒気」が襲（おそ）ってきた。船のあらゆる部分が急にカリッ、カリッと鳴り出すと、水に濡れていた甲板や手すりに、氷が張ってしまった。船腹は白粉（おしろい）でもふりかけたように、霜の結晶でキラキラに光った。水夫や漁夫は両頬（ほお）を抑えながら、甲板を走った。船は後に長く、曠野（こうや）の一本道のような跡をのこして、つき進んだ。

川崎船は仲々見つからない。

九時近い頃になって、ブリッジから、前方に川崎が一艘浮かんでいるのを発見した。

それが分ると、監督は「畜生、やっと分りやがっ

たど。畜生！」デッキを走って歩いて、喜んだ。すぐ発動機が降された。が、それは探がしていた第一号ではなかった。それよりは、もっと新らしい第36号と番号の打たれてあるものだった。明かにxxx丸のものらしい鉄の浮標(ブイ)がつけられていた。それで見るとxxx丸が何処かへ移動する時に、元の位置を知るために、そうして置いて行ったものだった。

浅川は川崎船の胴体を、指先きでトントンたたいていた。

「これアどうしてバンとしたもんだ。」ニヤッと笑った。「引いて行くんだ。」

そして第36号川崎船はウインチで、博光丸のブリッジに引きあげられた。川崎は身体を空でゆすりながら、雫(しずく)をバジャバジャ甲板に落した。「一(ひと)働きをしてきた」そんな大様な態度で、釣り上がって行く川崎を見ながら、監督が、「大したもんだ。大したもんだ！」と独言した。

網さばきをやりながら、漁夫がそれを見ていた。

「何んだ泥棒猫！ チェンでも切れて、野郎の頭さたたき落ちればえんだ。」

監督は仕事をしている彼等の一人一人を、そこ

から何かえぐり出すような眼付きで、見下しながら側を歩いて行った。そして大工をせっかちなドラ声で呼んだ。

すると、別な方のハッチの口から、大工が顔を出した。

「何んです。」

見当外れをした監督は、振り返ると、怒りッぽく、「何んです？ 馬鹿、番号をけずるんだ。カンナ、カンナ。」大工は分らない顔をした。

「あんぼたん、来い！」

肩幅の広い監督のあとから、鋸(のこぎり)の柄を腰にさして、カンナを持った小柄な大工が、びっこでも引いているような危い足取りで、甲板を渡って行った。川崎船の第36号の「3」がカンナでけずり落されて、「第六号川崎船」になってしまった。

「これでよし。これでよし。うッはァ、様(ざま)見やがれ！」監督は、口を三角形にゆがめると、背のびでもするように哄笑(こうしょう)した。

これ以上北航しても、川崎船を発見する当(あて)がなかった。第三十六号川崎船の引上げで、足ぶみをしていた船は、元の位置に戻るために、

ゆるく、大きくカーブをし始めた。空は晴れ上って、洗われた後のように澄んでいた。カムサツカの連峰が絵葉書で見るスイツツルの山々のように、くつきりと輝いていた。

行衛不明になった川崎船は帰らない。漁夫たちは、そこだけが水溜(たま)りのようにボツンと空いた棚から、残して行った彼らの荷物や、家族のいる住所をしらべたり、それぞれ万一の時に直(す)ぐ処置が出来るように取り纏(まと)めた。気持ちのいいことではなかった。それをしていると、漁夫たちは、まるで自分の痛い何処かを覗(のぞ)きこまれているようなつらさを感じた。中積船が来たら托送(たくそう)しようと、同じ苗字(みょうじ)の女名前がその宛先きになっている小包や手紙が、彼等の荷物の中から出てきた。そのうちの一人の荷物の中から、片仮名と平仮名の交った、鉛筆をなめり、なめり書いた手紙が出た。それが無骨な漁夫の手から、手へ渡されて行った。彼らは豆粒でも拾うように、ポツリ、ポツリ、しかしむさぼるように、それ等を読んでしまうと、嫌(いや)なものを見てしまったという風に頭をふっ

て、次ぎに渡してやった。　　子供からの手紙だった。

ぐずりと鼻をならして、手紙から顔を上げると、カスカスした低い声で、「浅川のためだ。死んだと分ったら、弔い合戦をやるんだ。」といった。

その男は図体の大きい、北海道の奥地で色々なことをやってきたという男だった。もっと低い声で、

「奴、一人ぐらいタタキ落せるべよ。」若い、肩のもり上った漁夫がいった。

「あ、この手紙いけねえ。すっかり思い出してしまった。」

「なア、」最初のがいった。「うっかりしていれば、俺たちだって奴にやられるんだで。他人(ひと)ごとでねえんだど。」

隅の方で、立膝をして、拇指(おやゆび)の爪をかみながら、上限をつかって、皆のいうのをひらいて聞いていた男が、その時、うん、うんと頭をふって、うなずいた。「万事、俺にまかせれ、その時ア！　あの野郎一人グイとやってしまうから。」皆はだまった。　　だまったまま、しかし、ホッとした。

博光丸が元の位置に帰ってから、三日して突然（！）その行衛不明になった川崎船が、しかも元氣よく帰ってきた。

彼らは船長室から「糞壺」に帰ってくると、忽（たちま）ち皆に、渦巻のように取巻かれてしまった。

彼等は「大暴風雨」のために、一たまりもなく操縦の自由をなくしてしまった。そうならばもう襟首（えりくび）をつかまれた子供より他愛（たあい）なかった。一番遠くに出ていたし、それに風の工合もちょうど反対の方向だった。皆は死ぬことを覚悟した。漁夫は何時でも「安々と」死ぬ覚悟をすることに「慣らされて」いた。が（！）こんなことは滅多にあるものではない。次の朝、川崎船は半分水船になったまま、カムサツカの岸に打ち上げられていた。そして皆は近所のロシア人に救われたのだった。

そのロシア人の家族は四人暮しだった。女がいたり、子供がいたりする「声というものに渴していた彼らにとって、そこは何ともいえなく魅力だった。それに親切な人たちばかりで、色々と進んで世話をしてくれた。しかし、初め皆はやっぱり、

分らない言葉をいったり、髪の色や眼の色の異った外国人であるということが不気味(ぶきみ)だった。

何アんだ、俺たちと同じ人間ではないか、ということが、しかし直(す)ぐ分らされた。難破のことが知れると、村の人たちが沢山集ってきた。そこは日本の漁場などがある所とはよほど離れていた。

彼らはそこに二日いて、身体を直し、そして帰ってきたのだった。「帰ってきたくはなかった。」誰がこんな地獄に帰りたかって！が、彼らの話は、それだけで終ってはいない。「面白いこと」が、その外にかくされていた。

ちょうど帰る日だった。彼らがストオヴの周りで、身仕度をしながら話していると、ロシア人が四、五人入ってきた。中に支那(しな)人が一人交っていた。顔が巨(おお)きくて、赤い、短い額の多い、少し猫背の男が、いきなり何か大声で手振りをして話し出した。船頭は、自分たちがロシア語は分らないのだという事を知らせるために、眼の前で手を振って見せた。ロシア人が一区切りいうと、その口元を見ていた支那人は日本

語をしゃべり出した。それは聞いている方の頭が、かえってごちゃごちゃになってしまうような、順序の狂った日本語だった。言葉と言葉が酔払いのように、散り散りによろめいていた。

「貴方(あなた)がた、金キット持っていない。」

「そうだ。」

「貴方がた、貧乏人。」

「そうだ。」

「だから、貴方がた、プロレタリア。分る？」

「うん。」

ロシア人が笑いながら、その辺を歩き出した。時々立ち止って、彼らの方を見た。

「金持、貴方がたをこれする。(首を締める恰好をする。)金持だんだん大きくなる。

(腹のふくれる真似。)貴方がたどうしても駄目、貧乏人になる。分る？日本の国、駄目。働く人、これ。(顔をしかめて、病人のような恰好。)働かない人、これ。

えへん、えへん。(偉張って歩いてみせる。)」

それらが若い漁夫には面白かった。「そうだ、そうだ」といって、笑い出した。

「働く人、これ。働かない人、これ。（前のを繰り返して。）そんなの駄目 働く人、これ。（今度は逆に、胸を張って偉張ってみせる。）働かない人、これ。（年取った乞食のような恰好。）これ良ろし。 分る？ ロシアの国、この国。働く人ばかり。働く人ばかり、これ。（偉張る。）ロシア、働かない人いない。ずるい人いない。人の首しめる人いない。 分る？ ロシアちつとも恐ろしくない国。みんな、みんなウソばかりいって歩く。」

彼らは漠然（ばくぜん）と、これが「恐ろしい」「赤化」というものではないだろうか、と考えた。が、それが「赤化」なら、馬鹿に「当り前」のことであるような気が一方していた。しかし何よりグイ、グイと引きつけられて行った。

「分る、本当、分る！」

ロシア人同志が二、三人ガヤガヤ何かしゃべり出した。支那人はそれらをきいていた。

それからまた吃（ども）りのように、日本の言葉を一つ、一つ拾いながら、話した。

「働かないで、お金儲ける人いる。プロレタリア、いつでも、これ。（首をしめられる恰好。）

これ、駄目 プロレタリア、貴方がた、一人、二人、三人 百人、千人、五万人、十万人、みんな、みんな、これ（子供のお手々つないで、の真似をしてみせる。）強くなる。大丈夫。（腕をたたいて）負けない、誰にも。分る？」

「ん、ん！」

「働かない人、にげる。（一散に逃げる恰好。）大丈夫、本当。働く人、プロレタリア、偉張る。（堂々と歩いてみせる。）プロレタリア一番偉い。

プロレタリア居ない。みんな、パン無い。みんな死ぬ。分る？」

「ん、ん！」

「日本、まだ、まだ駄目。働く人、これ。（腰をかがめて、縮こまってみせる。）働かない人、れ。（偉張って、相手をなぐり倒す恰好。）それ、みんな駄目！ 働く人、これ。（形相凄く立ち上る、突っかかって行く恰好。相手をなぐり倒し、フンづける真似。）働かない人、これ。（逃げる恰好。）日本、働く人ばかり、いい国。

- プロレタリアの国！ 分る？」

「ん、ん、分る！」

ロシア人が奇声をあげて、ダンスの時のような

、
足ぶみをした。

「日本、働く人、やる。（立ち上って、刃向
（はむか）う恰好。）うれしい。ロシア、みんな嬉
しい。バンザイ。貴方がた、船へかえる。貴
方がたの船、働かない人、これ。（偉張る。）貴
方がた、プロレタリア、これ、やる！（拳闘のよ
うな真似 それからお手々つないでをやり、ま
た突っかかって行く恰好。）大丈夫、勝つ！

分る？」

「分る！」知らないうちに興奮していた若い漁
夫が、いきなり支那人の手を握った。

「やるよ、キットやるよ！」

船頭は、これが「赤化」だと思っていた。馬鹿
に恐ろしいことをやらせるものだ。これでこ
の手で、ロシアが日本をマンマと騙（だま）すんだ
と思った。

ロシア人たちは終ると、何か叫声をあげて、彼
らの手を力一杯握った。抱きついて硬い毛の頬を
すりつけたりした。面喰った日本人は、首を後に
硬直さして、どうしていいか分らなかった… …。

皆は「糞壺」の入口に時々眼をやり、その話
をもっともっととうながした。彼らは、それから見

てきたロシア人のことを色々話した。そのどれもが、吸取紙に吸われるように、皆の心に入りこんだ。

「おい、もう止(よ)せよ。」

船頭は、皆が変にムキにその諸に引き入れられているのを見て、一生懸命にしゃべっている若い漁夫の肩を突ついた。

四

靄(もや)が下りていた。何時も厳しく機械的に組合わさっている通風パイプ、煙筒、ウインチの腕、吊り下がっている川崎船、デッキの手すり、などが、薄ぼんやり輪廓をぼかして、今までにない親しみをもって見えていた。柔かい、生ぬるい空気が、頬(ほお)を撫(な)でて流れる。こんな夜はめずらしかった。

トモのハッチに近く、蟹の脳味噌の匂いがムツとくる。網が山のように積みさっている間に、高さの異なる二つの影が佇(たたず)んでいた。

過労から心臓を悪くして、身体が青黒く、ムク

ンでいる漁夫が、ドキッ、ドキッとする心臓の音でどうしても眠れず、甲板に上ってきた。手すりにもたれて、フ糊(のり)でも溶(と)かしたようにトロツとしている海を、ぼんやり見ていた。この身体では監督に殺される。しかし、それにしてはこの遠いカムサッカで、しかも陸も踏めずに死ぬのは淋し過ぎる。　　すぐ考え込まさった。その時、網と網の間に、誰かいるのに漁夫が気付いた。

蟹の甲殻の片(かけら)を時々ふむらしく、その昔がした。

ひそめた声が聞えてきた。

漁夫の眠が慣れてくると、それが分ってきた。十四、五の雑夫に漁夫が何かいっているのだった。何を話しているのかは分らなかった。後向きになっている雑夫は、時々イヤ、イヤをしている子供のように、すねているように、向きをかえていた。それにつれて、漁夫もその通り向きをかえた。それが少しの間続いた。漁夫は思わず(そんな風だった。)高い声を出した。が、すぐ、低く早口に何かいった。と、いきなり雑夫を抱きすくめてしまった。喧嘩(けんか)だな、と思った。着物で口を抑えられた「むふ、むふ...」という息声だけ

が、ちょっとしたの間聞えていた。しかし、そのまま動かなくなつた。その瞬間だった。柔かい霧の中に、雑夫の二本の足がローソクのように浮かんだ。下半分が、すっかり裸になってしまっている。それから雑夫はそのまま蹲(しゃが)んだ。と、その上に、漁夫が碁(がま)のように覆(おお)いかぶさった。それだけが「眼の前」で、短かいグッと咽喉(のど)につかえる瞬間に行われた。見ていた漁夫は、思わず眼をそらした。酔わされたような、撲(な)ぐられたような、興奮をワクワクと感じた。

漁夫達はだんだん内からむくれ上ってくる性慾に悩まされ出してきていた。四カ月も、五カ月も不自然に、この頑丈な男たちが「女」から離されていた。函館で買った女の話や、露骨な女の陰部の話が、夜になると、きまって出た。一枚の春画がボサボサに紙に毛が立つほど、何度も何度もグルグル廻された。

... ..

床とれの、

こちら向けえの、

口すえの、

足をからめの、
気をやれの、
ホンに、つとめはつらいもの。

誰か歌った。すると、一度で、その歌が海綿にでも吸われるように、皆に覚えられてしまった。何かすると、すぐそれを歌い出した。そして歌ってしまってから、「えッ、畜生！」と、ヤケに叫んだ。眼だけ光らせて。

漁夫たちは寝てしまってから、

「畜生、困った！ どうしたって眠(ね)れないや。」と、身体をゴロゴロさせた。「駄目だ、倅が立って！」

「どうしたら、ええんだ！」 終いに、
そういって、勃起(ぼっき)している睾丸(こうがん)を握りながら、裸で起き上ってきた。大きな、
身体の漁夫の、
そうするのを見ると、
身体の、
しまる、何か凄惨(せいさん)な気さえした。度胆(どぎも)を抜かれた学生は、眼だけで隅の方から、
それを見ていた。

夢精をするのが何人もいた。誰もいない時、たまらなくなつて自決をするものもいた。 棚の

隅に、カタのついた汚れた猿又（さるまた）や禪（ふんどし）が、しめっぽく、すえた臭いをして円（ま）るめられていた。学生はそれを野糞（のぐそ）のように踏みつけることがあった。

- それから、雑夫の方へ「夜這（よば）い」が始まった。バットをキャラメルに換えて、ポケットに二つ三つ入れると、ハッチを出て行った。

便所臭い、漬物樽（つけものだる）の積みさっている物置きを、コックが開けると、薄暗い、ムツとする中から、いきなり横ッ面でもなぐられるように、怒鳴られた。

「閉めるッ！ 今、入ってくると、この野郎、タタキ殺すぞ！」

× × ×

無電係が、他船の交換している無電を聞いて、その収獲を一々監督に知らせた。それで見ると、本船がどうしても負けているらしい事が分ってきた。監督がアセリ出した。

すると、テキ面にそのことが何倍かの強さになって、漁夫や雑夫に打（ぶ）ち当たってきた。何時でも、そして、何んでもドン詰りの引受所が「彼ら」だけだった。監督や雑夫長はわざと「船員」

と「漁夫、雑夫との間に、仕事の上で競争させるように仕組んだ。

同じ蟹つぶしをしていながら「船員に負けた」となると、(自分の儲けになる仕事でもないのに、)漁夫や雑夫は「何に糞ッ!」という気になる。監督は「手を打って」喜んだ。今日勝った、今日負けた、今度こそ負けるもんか 血の滲(にじ)むような日が滅茶苦茶(めちゃくちゃ)に続く。同じ日のうちに、今までより五、六割も殖(ふ)えていた。しかし五日、六日になると、両方とも気抜けしたように、仕事の高がズン、ズン減って行った。仕事をしながら、時々ガクリと頭を前に落した。監督はものもいわないで、なぐりつけた。不意を喰らって、彼らは自分でも思いがけない悲鳴を「キャツ!」とあげた。 皆は敵(かたき)同士か、言葉を忘れてしまった人のように、お互にだまりこくって働いた。ものをいうだけのぜいたくな「余分」さえ残っていなかった。

監督はしかし、今度は、勝った組に「賞品」を出すことを始めた。燻(くすぶ)りかえていた木が、また燃え出した。

「他愛のないものさ。」監督は、船長室で、船

長を相手にビールを飲んでいた。

船長は肥えた女のように、手の甲にえくぼが出ていた。器用に金口(きんぐち)をトントンとテーブルにたたいて、分らない笑顔で答えた。船長は、監督が何時でも自分の眼の前で、マヤマヤ邪魔をしているようで、たまらなく不快だった。漁夫たちがワッと事を起して、こいつをカムサツカの海へたたき落すようなことでもないかな、そんな事を考えていた。

監督は「賞品」の外に、逆に、一番働きの少ないものに「焼き」を入れる事を貼紙した。鉄棒を真赤に焼いて、身体にそのまま当てることだった。彼らは何処まで逃げても離れない、まるで自分自身の影のような「焼き」に始終追いかけて、仕事をした。仕事が尻上りに、目盛りをあげて行った。

人間の身体には、どのぐらいの限度があるか、しかしそれは当の本人よりも監督の方が、よく知っていた。一仕事が終わって、丸太棒のように柵の中に横倒れに倒れると、「期せずして」う、う、うめいた。

学生の一人は、小さい時に祖母に連れられて、

お寺の薄暗いお堂の中で見たことのある「地獄」の絵が、そのままこうであることを思い出した。それは、小さい時の彼には、ちょうどわばみのような動物が、沼地に、よる、よると這っているのを思わせた。それとそっくり同じだった。

過労がかえって皆を眠らせない。夜中過ぎて、突然、硝子の表に思いっ切り庇(きず)をつけるような不気味な歯ぎしりが起ったり、寝言や、うなされているらしい突調子な叫声が、薄暗い「糞壺」のところどころから起った。

彼らは寝れずにいるとき、フト、「よく、まだ生きているな...」と自分で自分の生身の身体にささやきかえすことがある。よく、まだ生きている　　そう自分の身体に！

学生上りは一番「こたえて」いた。

「ドストイェフスキーの死人の家な、ここから見れば、あれだって大したことでないって気がする。」　　その学生は、糞が何日もつまって、頭を手拭で力一杯に締めないと、眠れなかった。

「それアそうだろう。」相手は函館から持ってきたウイスキーを、薬でも飲むように、舌の先きで少しずつ嘗(な)めていた。「何んしろ大事業だ

からな。人跡未到の地の富源を開発するッてんだから、大変だよ。この蟹工船だって、今はこれで良くなったそうだよ。天候や潮流の変化の観測が出来なかつたり、地理が実際にマスターされていなかつたりした創業当時は、幾ら船が沈没したりしたか分らなかつたそうさ。露国の船には沈められる、捕虜になる、殺される、それでも屈しないで、立ち上り、立ち上り苦闘して来たからこそ、この大富源が俺たちのものになったのさ。...
...まァ仕方がないさ。」

「... ..」

歴史が何時でも書いているように、それはそうかも知れない気がする。しかし、彼の心の底にわだかまっているムツとした気持が、それでちっとも晴れなく思われた。彼は黙ってベニヤ板のように固くなっている自分の腹を撫でた。弱い電気に触れるように、拇指(おやゆび)のあたりが、チャラチャラとしびれる。イヤな気持がした。拇指を眼の高さにかざして、片手でさすってみた。

皆は夕飯が終って、「糞壺」の真中に一つ取りつけてある、割目が地図のように入っているガタガタのストーヴに寄っていた。お互の身体が少

し温まってくると、湯気が立った。蟹の生っ臭い匂いがムシて、ムツと鼻に来た。

「何んだか、理窟は分らねども、殺されたくねえで。」

「んだよ！」

憂々した気持ちが、もたれかかるように、そこへ雪崩(なだ)れて行く。殺されかかっているんだ！皆はハッキリした焦点もなしに、怒りッぽくなっていた。

「お、俺たちの、も、ものにもならないのに、く、糞、こッ殺されてたまるもんか！」

吃(ども)りの漁夫が、自分でももどかしく、顔を真赤に筋張らせて、急に、大きな声を出した。ちょっと、皆だまった。何かにグイと心を「不意に」突き上げられたのを感じた。

「カムサツカでア死にたくないな。」

「中積船、函館ば出たとよ。無電係の人いってた。」

「帰りてえな。」

「帰れるもんか。」

「中積船でヨク逃げる奴がいるってな。」

「んか!?!.....ええな。」

「漁に出る振りして、カムサッカの陸さ逃げて、露助と一緒に赤化宣伝ばやっているものもいるってな。」

「... ..」

「日本帝国のためか、また、いい名義を考えたもんだ。」学生は胸のボタンを外(はず)して、階段のように一つ一つ窪(くぼ)みの出来ている胸を出して、あくびをしながら、ゴシゴシ掻(か)いた。垢(あか)が乾いて、薄い雲母(うんも)のように剥(は)げてきた。

「んよ、か、会社の金持ばかり、ふ、ふんだくるくせに。」

カキの貝殻のように、段々のついた、たるんだ眼蓋(まぶた)から、弱々しい濁った視線をストーヴの上にボンヤリ投げていた中年を過ぎた漁夫が唾をはいた。ストーヴの上に落ちると、それがクルックルッと真円にまるくなって、ジュウジュウいいながら、豆のように跳ね上って、見る間に小さくなり、油煙粒ほどの小さいカスを残して、無くなった。皆はそれにウカツな視線を投げている。

「それ、本当かも知れないな。」

しかし、船頭が、ゴム底タビの赤毛布の裏を出

して、ストーヴにかざしながら、「おい反逆（てむかい）なんかしないでくれよ。」といった。

「... .. 。」

「勝手だべよ。糞。」吃りが唇を蛤（はまぐり）のように突き出した。

ゴムの焼けかかっているイヤな臭いがした。

「おい、親爺（おど）、ゴム--!」

「ん、あ、こげた!」

波が出て来たらしく、サイドが微かになってきた。船も子守唄ほどに揺れている。腐った海漿（ほおずき）のような五燭灯でストーヴを囲んでいるお互の、後に落ちている影が色々にもつれて、組合った。静かな夜だった。ストーヴの口から赤い火が、膝から下にチラチラと反映していた。不幸だった自分の様が、ひょいとまるッきりひょいと、しかも一瞬間だけ見返される不思議に静かな夜だった。

「煙草無（ね）えか？」

「無え... .. 。」

「無えか？... .. 。」

「なかったな。」

「糞。」

「おい、ウイスキーをこつちにも廻せよ、な。」

相手は角瓶(かくびん)を逆かさに振ってみせた。

「おっと、勿体(もつたい)ねえことするなよ。」

「ハハハハハハハ。」

「飛んでもねえ所さ、しかし来たもんだな、俺も...」。その漁夫は芝浦の工場にいたことがあった。その話がそれから出た。それは北海道の労働者たちには「工場」だとは想像もつかない「立派な処」に思われた。「ここの百に一つぐらいのことがあったって、あっちじゃストライキだよ。」といった。

その事からそのキツかけで、お互の今までしてきた色々なことが、ひょいひょい話に出てきた。

「国道開たく工事」「灌漑(かんがい)工事」「鉄道敷設(しせつ)」「築港埋立(うめたて)」「新鉱発掘」「開墾」「横取人夫」「鎌取り」 - 殆(ほと)んど、そのどれかを皆はしてきていた。

内地では、労働者が「横平(おうへい)」になって無理がきかなくなり、市場も大体開拓されつくして、行き詰ってくると、資本家は「北海道・樺太(からふと)へ！」鉤爪(かぎづめ)をのばした。そこでは、彼らは朝鮮や、台湾の殖民地と同じよ

うに、面白いほど無茶な「虐使」が出来た。しかし、誰も、何んともいえない事を、資本家はハッキリ呑み込んでいた。「国道開たく」「鉄道敷設」の土工部屋では、虱(しらみ)より無雑作に土方がタタキ殺された。虐使に堪(た)えられなくて逃亡する。それが捕(つか)まると、棒杭(ぼうくい)にしばりつけて置いて、馬の後足で蹴(け)らせたり、裏庭で土佐犬に噛(か)み殺させたりする。それを、しかも皆の目の前でやってみせるのだ。肋骨(ろっこつ)が胸の中で折れるボクッともった音をきいて、「人間でない」土方さえ思わず額を抑えるものがいた。気絶をすれば、水をかけて生かし、それを何度も繰り返した。終(しま)いには風呂敷包みのように、土佐犬の強靱(きょうじん)な首で振り廻されて死ぬ。ぐつたり広場の隅(すみ)に投げ出されて、放って置かれてからも、身体の何処かが、ピクピクと動いていた。焼火箸(やけひばし)をいきなり尻にあてることや、六角棒で腰(こし)が立たなくなるほどなぐりつけることは「毎日」だった。飯を食っていると、急に、裏で鋭い叫声が起る。すると、人の肉が焼ける生ッ臭い匂いが流れてきた。

「やめた、やめた。 とても飯なんて、食べたもんじゃねえや。」

箸(はし)を投げる。が、お互暗い顔で見合った。

脚気(かつけ)では何人も死んだ。無理に働かせるからだった。死んでも「暇がない」ので、そのまま何日も放って置かれた。裏へ出る暗がり、無雑作にかけてあるムシ口の裾から、子供のよう妙に小さくなった、黄黒く、艶(つや)のない両足だけが見えた。

「顔に一杯蠅(はえ)がたかっているんだ。側を通ったとき、一度にワーンと飛び上るんでないか！」

額を手でトントン打ちながら入ってくると、そういう者があった。

皆は朝は暗いうちに仕事場に出された。そして鶴嘴(つるはし)のさきがチラッ、チラッと青白く光って、手元が見えなくなるまで、働かされた。近所に建っている監獄で働いている囚人の方を、皆はかえって羨(うらやま)しがった。殊(こと)に朝鮮人は親方、棒頭(ぼうがしら)からも、同じ仲間の土方(日本人の)からも、「踏んづける」ような待遇をうけていた。

そこから、四、五里も離れた村に駐在している
巡査が、それでも時々手帳をもって、取調べにテ
クテクやってくる。夕方までいたり、泊りこんだ
りした。しかし土方たちの方へは一度も顔を見せ
なかった。そして、帰りには真赤な顔をして、歩
きながら道の真中を、消防の真似(まね)でもして
いるように、小便を四方にジャジャやりながら、
分らない独りごとをいって帰って行った。

北海道では、字義通り、どの鉄道の枕木もそれ
はそのまま一本一本労働者の青むくれた「死骸
(しがい)」だった。築港の埋立(うめたて)には、
脚気の土工が生きたまま「人柱」のように埋めら
れた。北海道の、そういう労働者を「タコ
(蛸)」とっている。蛸は自分が生きて行くた
めには、自分の手足をも食ってしまう。これこそ、
全くそっくりではないか！そこでは誰をも憚
(はばか)らない「原始的」な搾取(さくしゅ)が出
来た。「儲(もう)け」がゴゾリ、ゴゾリ掘りかえ
ってきた。しかも、そして、その事を巧みに「
国家的」富源の開発ということに結びつけて、マ
ンマと合理化していた。抜け目がなかった。「国
家」のために、労働者は「腹が減り」「タタキ殺

されて」行った。

「其処(そこ)から生きて帰れたなんて、神助け事だよ。有難かったな！　んでも、この船で殺されてしまったら、同じだよ。　何アーンでえ！」そして突調子なく大きく笑った。その漁夫は笑ってしまってから、しかし眉(まゆ)のあたりをアリアリと暗くして、横を向いた。

鉱山(やま)でも同じだった。　新しい山に坑道を掘る。そこにどんな瓦斯(ガス)が出るか、どんな飛んでもない変化が起るか、それを調べあげて一つの確針をつかむのに、資本家は「モルモット」より安く買える「労働者」を、乃木軍神がやったと同じ方法で、入り代り、立ち代り雑作(ぞうさ)なく使い捨てた。鼻紙より無雑作に！

「マグロ」の刺身のような労働者の肉片が、坑道の壁を幾重にも幾重にも丈夫にして行った。都会から離れていることを好い都合にして、ここでもやはり「ゾッ」とすることが行われていた。トロッコで運んでくる石炭の中に拇指(おやゆび)や小指がバラバラに、ねばって交ってくることもある。女や子供はそんな事にはしかし眉を動かしてはならなかった。そう「慣らされていた」。彼らは無

表情に、それを次の持場まで押してゆく。その
石炭が巨大な機械を、資本家の「利潤」のために
動かした。

どの坑夫も、長く監獄(かんごく)に入れられた
人のように、艶(つや)のない黄色くむくんだ、始
終ボンヤリした顔をしていた。日光の不足と、炭
塵(たんじん)と、有害ガスを含んだ空気と、温度
と気圧の異常とで、眼に見えて身体がおかしくな
ってゆく。「七、八年も坑夫をしていれば、凡
(およ)そ四、五年間ぐらいは打(ぶ)っ続けに真暗
闇(まっくらやみ)の底にいて、一度だって太陽を
拝まなかったことになる、四、五年も！」

だが、どんな事であろうと、代りの労働者を何時
でも沢山仕入れることの出来る資本家には、そんな
ことはどうでもいい事であった。冬が来ると、
「矢張(やは)り」労働者はその坑山に流れ込んで
行った。

それから「入地百姓」 北海道には「移民百
姓」がいる。「北海道開拓」「人口食糧問題解決、
移民奨励」、日本少年式な「移民成金(なりきん)」
などウマイ事ばかり並べた活動写真を使って、田
畑を奪われそうになっている内地の貧農を煽動

(せんだう)して、移民を奨励して置きながら、四、五寸も掘り返えせば、下が粘土ばかりの土地に放り出される。豊饒(ほうじょう)な土地には、もう立札が立っている。雪の中に埋められて、馬鈴薯(ばれいしょ)も食えずに、一家は次の春には餓死することがあった。それは「事実」何度もあった。雪が溶けた頃になって、一里も離れている「隣りの人」がやってきて、始めてそれが分った。口の中から、半分のみかけている藁屑(わらくず)が出てきたりした。

稀(ま)れに餓死から逃れ得ても、その荒地を十年もかかって耕やし、ようやくこれで普通の畑になったと思える頃、それは実にちアんと、「外(ほか)の人」のものになるようになっていた。資本家は金利貸、銀行、華族、大金持は、嘘(うそ)のような金を貸して置けば、(投げ捨てて置けば)荒地は、肥えた黒猫の毛並のように豊饒な土地になって、間違いなく、自分のものになってきた。そんな事を真似て、濡手(ぬれで)をきめこむ、眼の鋭い人間も、また北海道に入り込んできた。百姓は、あっちからも、こつちからも自分のものを噛みとられて行った。そして終(し

ま)いには、彼らが内地でそうされたと同じように「小作人」にされてしまっていた。そうになって百姓は始めて気付いた。「失敗(しま)った！」

彼らは少しでも金を作って、故里(ふるさと)の村に帰ろう、そう思って、津軽海峡を渡って、雪の深い北海道へやってきたのだった。蟹工船にはそういう、自分の土地を「他人」に追い立てられて来たものが沢山いた。

積取人夫は蟹工船の漁夫と似ていた。監視付きの小樽(おたる)の下宿屋にゴロゴロしていると、樺太(からふと)や北海道の奥地へ船で引きずられて行く。足を「一寸」(いっすん)すべらすと、ゴンゴンとうなりながら、地響をたてて転落してくる角材の下になって、南部センベイよりも薄くされた。ガラガラとウインチで船に積まれて行く、水で皮がペロペロになっている材木に、拍子(ひょうし)を食って、一なぐりされると、頭(かぶ)のつぶれた人間は、蚤(のみ)の子よりも軽く、海の中へたたき込まれた。

内地では、何時までも、黙って「殺されていない」労働者が一かたまりに固って資本家へ反抗している。しかし「殖民地」の労働者は、そう

いう事情から完全に「遮断(しゃだん)」されていた。

苦しくて、苦しくてたまらない。しかし転(ころ)んで歩けば歩くほど、雪ダルマのように苦しみを身体に背負いこんだ。

「どうなるかな... ..?」

「殺されるのさ、分ってるべよ。」

「... ..」。何かいいたげな、しかしグイとつまったまま、皆だまった。

「こ、こ、殺される前に、こつちから殺してやるんだ。」どもりがブッキラ棒に投げつけた。

トブーン、ドブーンとゆるく腹(サイド)に波が当たっている。上甲板の方で、何処かのパイプから、スチームがもれているらしく、シー、シン、シンという鉄瓶(てつびん)のたぎるような、柔かい音が絶えずしていた。

寝る前に、漁夫たちは垢(あか)でスルメのようにガバガバになったメリヤスやネルのシャツを脱いで、ストーヴの上に広げた。囲んでいるものたちが、炬燵(こたつ)のように各々その端をもって、熱くしてからバタバタとほろった。ストーヴの上

に虱(しらみ)や南京虫(ナンキンむし)が落ちると、プツン、プツンと、音をたてて、人が焼ける時のような生ッ臭い匂(にお)いがした。熱くなると、居たたまらなくなかった蚤が、シャツの縫目から、細かい沢山の足を夢中に動かして、出て来る。つまみ上げると、皮膚の脂肪(あぶら)ッぽいコロツとした身体の感触がゾツときた。かまきり虫のような不気味な頭が、それと分るほど肥えているのもいた。

「おい、端を持ってけれ。」

禪(ふんどし)の片端を持ってもらって、広げながら蚤をとった。

漁夫は乳を口に入れて、前歯で、音をさせてつぶしたり、両方の拇(おやゆび)指の爪で、爪が真赤になるまでつぶした。子供が汚い手をすぐ着物に拭(ふ)くように、禪天(はんてん)の裾(すそ)にぬぐうと、また始めた。それでもしかし眠れない。何処から出てくるか、夜通し虱(しらみ)と蚤(のみ)と南京虫(ナンキンむし)に責められる。どうしても退治し尽されなかった。薄暗(くら)く、ジメジメしている棚に立っていると、すぐモゾモゾと何十匹もの蚤(のみ)が脛(すね)を這い上ってき

た。終いには自分の体の何処かが腐ってでもいいの
のか、と思った。蛆(うじ)や蠅に取りつかれて
いる腐爛(ふらん)した「死体」ではないか、そんな
不気味さを感じた。

お湯には、初め一日置きに入れた。身体が生ッ
臭くよごれて仕様がなかった。しかし一週間もす
ると、三日置きになり、一カ月ぐらい経つと、一
週間一度。そしてとうとう月二回にされてしまっ
た。水の濫費(らんぴ)を防ぐためだった。しかし、
船長や監督は毎日お湯に入った。それは濫費には
ならなかった。(！) 身体が蟹の汁で汚れる。
それがそのまま何日も続く。それで虱か南京虫が
湧(わ)かない「筈(はず)」がなかった。

禪を解くと、黒い粒々がこぼれ落ちた。禪をし
めたあとが、赤くかたがついて、腹に輪を作った。
そこがたまらなく搔ゆかった。寝ていると、ゴシ
ゴシと身体をやけにかく音が何処からも起った。
モゾモゾと小さいゼンマイのようなものが、身体
の下側を走るかと思うと 刺す。そのたびに漁
夫は身体をくねらし、寝返りを打った。しかしま
たすぐ同じだった。それが朝まで続く。皮膚が皮
癬(ひぜん)のように、ザラザラになった。

、 、 、
「死に風だべよ。」

「んだ、ちょうどええさ。」

仕方なく、笑ってしまった。

五

あわてた漁夫が二、三人デッキを走って行った。

曲り角で、急にまがれず、よろめいて、手すりにつかまった。サロン・デッキで修繕をしていた大工が背のびをして、漁夫の走って行った方を見た。寒風の吹きさらしで、涙が出て、初め、よく見えなかった。大工は横を向いて勢よく「つかみ鼻」をかんだ。鼻汁が風にあおられて、歪(ゆが)んだ線を描いて飛んだ。

とももの左舷のウインチがガラガラなっている。皆漁に出ている今、それを動かしているわけがなかった。ウインチにはそして何かブラ下がっていた。それが揺れている。吊(つ)り下がっているワイヤーが、その垂直線の囲(まわ)りを、ゆるく円を描いて揺れていた。「何んだべ？」その時、ドキッと来た。

大工は周章(あわて)たように、もう一度横を向いて「つかみ鼻」をかんだ。それが風の工合でズボンにひっかかった。トロツとした薄い水鼻だった。

「また、やってやがる。」大工は涙を何度も腕で拭(ぬぐ)いながら眼をきめた。

こっちから見ると、雨上りのような銀灰色の海をバックに、突き出ているウインチの腕、それにすっかり腰を縛られて、吊し上げられている雑夫が、ハッキリ黒く浮び出してみえた。ウインチの先端まで空を上ってゆく。そして雑巾(ぞうきん)切れでもひっかかったように、しばらくの間二十分もそのままに吊下げられている。それから下がって行った。身体をくねらして、もがいているらしく、両脚が蜘蛛(くも)の巣にひっかかった蠅(はえ)のように動いている。

やがて手前のサロンの陰になって、見えなくなった。一直線に張っていたワイヤーだけが、時々ブランコのように動いた。

涙が鼻に入ってゆくらしく、水鼻がしきりに出た。大工はまた「つかみ鼻」をした。それから横ポケットにブランブランしている金槌(かなづち)

を取って、仕事にかかった。

大工はひょいと耳をすまして 振りかえって見た。ワイヤ・ロープが、誰か下で振っているように揺れていて、ボクンボクンと鈍い不気味な音はそこからしていた。

ウィンチに吊された雑夫は顔の色が変っていた。死体のように堅くしめている唇から、泡(あわ)を出していた。大工が下りて行った時、雑夫長が薪(まき)を脇にはさんで、片肩を上げた窮屈な恰好(かっこう)で、デッキから海へ小便をしていた。あれでなくったんだな、大工は薪をちらっと見た。小便は風が吹く度に、ジャ、ジャとデッキの端にかかって、はねを飛ばした。

漁夫たちは何日も何日も続く過労のために、だんだん朝起きられなくなった。監督があきかん石油の空缶を寝ている耳もとでたたいて歩いた。眼を開けて、起き上がるまで、やけに缶をたたいた。脚気(かっけ)のものが、頭を半分上げて何かいつている。しかし監督は見ない振りで、空缶をやめない。声が聞えないので、金魚が水際に出てきて、空気を吸っている時のように、口だけバクバク動いてみえた。いい加減たたいてから、

「どうしたんだ、タタキ起すぞ！」と怒鳴りつけた。「いやしくも仕事が国家的である以上、戦争と同じなんだ。死ぬ覚悟で働け！ 馬鹿野郎！」

病人は皆蒲団(ふとん)を剥(は)ぎとられて、甲板へ押し出された。脚気(かぜき)のものは階段の段々に足先(あし)がつかまらずいた。手すりにつかまりながら、身体を斜めにして、自分の足を自分の手で持ち上げて、階段を上(あ)がった。心臓(しんざう)が左(ひだり)ごとに不気味(ふきみ)にピンピン蹴(け)るようにはね上(あ)った。

監督(かんとく)も、雑夫長(ざつぷぢやう)も病人(びやうじん)には、継子(ままこ)にでも対(たい)するよう(よう)にジリジリ(じりじり)と陰険(いんけん)だ(だ)った。「肉詰(にくぢめ)」を(を)して(して)いる(いる)と、追(お)い立(た)てて、甲板(かんばん)で「爪(つめ)たたき」を(を)させ(させ)られる(られる)。それ(それ)を(を)ちよ(ちよ)っと(と)して(して)いる(いる)と「紙巻(かみまき)」の方(かた)へ廻(まわ)される(される)。底(ぞこ)寒(ひや)くて、薄暗(うすくろ)い(い)工場(こうじやう)の中(なか)です(す)べる(べる)足元(あしもと)に気(き)をつ(つ)け(け)な(な)ら(ら)、立(た)ちつ(つ)く(く)して(して)いる(いる)と、膝(ひざ)から下(した)は義足(ぎそく)に触(ふ)る(る)より無感(むかん)覚(かく)にな(な)り、ひよ(ひよ)いとす(す)ると膝(ひざ)の関(かん)節(せつ)が、蝶(ちょう)つ(つ)が(が)い(い)が離(は)れた(れた)よ(よ)う(う)に、不覚(ふかく)にへ(へ)ナ(ナ)へ(へ)ナ(ナ)と坐(ま)り込(こ)んで(んで)しま(ま)い(い)そう(そう)にな(な)った(った)。

学生(がくせい)が蟹(かに)をつ(つ)ぶ(ぶ)した(した)手(て)の甲(か)で、額(かぶ)を(を)軽(かろ)く(く)た(た)たい(たい)て(て)いた(いた)。ちよ(ちよ)っと(と)す(す)ると、そのま(ま)ま(ま)横倒(よこた)し(し)に(に)後(ご)へ

倒れてしまった。その時、側に積さなっていた缶詰の空瓶がひどく音をたてて、学生の倒れた上に崩れ落ちた。それが船の傾斜に沿って、機械の下や荷物の中に、光りながら円く転んで行った。仲間が周章でて学生をハッチに連れて行こうとした。

それがちょうど、監督が口笛を吹きながら工場に下りてきたのと、会った。ひょいと見てとると、

「誰が仕事を離れったんだ！」

「誰が!?...」思わずグッと来た一人が、肩でつつかかるように、せき込んだ。

「誰がア　　？　この野郎、もう一度いってみろ！」監督はポケットからピストルを取り出して、玩具のようにいじり廻した。それから、急に大声で、口を三角形にゆがめながら、背のびをするように身体をゆすって、笑い出した。

「水を持って来い！」

監督は桶(おけ)一杯に水を受取ると、枕木のように床に置き捨てになっている学生の顔に、いきなり　　一度に、それを浴(あび)せかけた。

「これでええんだ。　　要(い)らないものなんか見なくてもええ、仕事でもしやがれ！」

次の朝、雑夫が工場に下りて行くと、旋盤（せんばん）の鉄柱に前の日の学生が縛りつけられているのを見た。首をひねられた鶏のように、首をガクリ胸に落とし込んで、背筋の先端に大きな関節を一つポコンと露（あら）わに見せていた。そして子供の前掛けのように、胸に、それが明かに監督の筆致で、

「此者ハ不忠ナル偽病者ニツキ、麻縄（あさなわ）ヲ解クコトヲ禁ズ。」

と書いたボール紙を吊していた。

額に手をやってみると、冷えきった鉄に触るより冷たくなっている。雑夫らは工場に入るまでガヤガヤしゃべっていた。それが誰も口をきくものがない。後から雑夫長の下りてくる声をきくと、彼らはその学生の縛られている機械から二つに分れて各々の持場に流れて行った。

蟹漁が忙がしくなると、ヤケに当たってくる。前歯を折られて、一晩中「血の唾（つば）」をはいたり、過労で作業中に卒倒したり、眼から血を出したり、平手で滅茶苦茶に叩（たた）かれて、耳が聞えなくなったりした。あんまり疲れてくると、皆は酒に酔ったよりも他愛なくなつた。時間がくる

と、「これでいい」と、フト安心すると、瞬間クラクラッとした。

皆が仕舞いかけると、「今日は九時までだ。」と監督が怒鳴って歩いた。

「この野郎たち、仕舞いだっていう時だけ、手廻しを早くしやがって！」

皆は高速度写真のようにノロノロまた立ち上った。それしか気力がなくなっていた。

「いいか、ここへは二度も、三度も出直して来れるところじゃないんだ。それに何時だって蟹が取れるとも限ったものでもないんだ。それを一日の働きが十時間だから十三時間だからって、それでピッタリやめられたら、飛んでもないことになるんだ。仕事の性質(たち)が異(ちが)うんだ。いいか、その代り蟹が採れない時は、勿体(もったい)ないほどブラブラさせておくんだ。」監督は「糞壺」へ降りてきて、そんなことをいった。

「露助はな、魚が何んぼ眼の前で群化(くき)てきても、時間が来れば一分も変わらずに、仕事をブン投げてしまおうんだ。んだからんな心掛けだから露西亜(ロシア)の国がああなったんだ、日本男児の断じて真似てならないことだ！」

何にいつてるんだ、ペテン野郎！ そう思って聞いていないものもあった。しかし大部分は監督にそういわれると日本人はやはり偉いんだ、という気にされた。そして自分たちの毎日の残虐な苦しさが、何か「英雄的」なものに見え、それがせめても皆を慰めさせた。

甲板で仕事をしていると、よく水平線を横切って、駆逐艦(くちくかん)が南下して行った。後尾に日本の旗がはためくのが見えた。漁夫らは興奮から、眼に涙を一杯ためて、帽子をつかんで振った。あれだけだ。俺たちの味方は、と思った。

「畜生、あいつを見ると、涙が出やがる。」

だんだん小さくなって、煙にまつわって見えなくなるまで見送った。

雑巾切れのように、クタクタになって帰ってくると、皆は思い合わせたように、相手もなく、ただ「畜生！」と怒鳴った。暗がり、それは憎悪(ぞうお)に満ちた牡牛(おうし)の唸(うな)り声に似ていた。誰に対してか彼ら自身分ってはいなかったが、しかし毎日毎日同じ「糞壺」の中にいて、二百人近くのものらがお互にブッキラ棒にしゃべり合っているうちに、眼に見えずに、考えること、

、 、 、 、
いうこと、 することが、 (なめくじが地面を這う
ほどののろさだが、) 同じになって行った。

その同じ流れのうちでも、 勿論澱(よど)んだよう
に足ぶみをするものが出来たり、 別な方へ外(そ)
れて行く中年の漁夫もある。 しかしそのどれもが、
自分では何んにも気付かないうちに、 そうなって
行き、 そして何時の間にか、 ハッキリ分れ、 分れ
になっていた。

朝だった。 タラップをノロノロ上りながら、 炭
山(やま)から来た男が、 「とても続かねえや。」
といった。

前の日は十時近くまでやって、 身体は壊(こわ)
れかかった機械のようにギクギクしていた。 タラ
ップを上りながら、 ひょいとすると、 眠っていた。
後から「オイ」と声をかけられて思わず手と足を
動かす。 そして、 足を踏み外(はず)して、 のめっ
たまま腹ん這(ば)いになった。

仕事につく前に、 皆が工場に降りて行って、 片
隅(かたすみ)に溜った。 どれも泥人形のような顔
をしている。

「俺ア仕事サボるんだ。 出来ねえ。」 炭山
(やま)だった。

皆も黙ったまま、顔を動かした。

ちょっとして、

、
、
、

「大焼きが入るからな。」と誰かいった。

「ずるけてサボるんでねえんだ。働けねえからだよ。」

炭山が袖を上膊(じょうはく)のところまで、まくり上げて、眼の前ですかして見るようにかざした。

「長げえことねえんだ。俺アずるけてサボるんでねえだど。」

「それだら、そんだ。」

「... ..。」

その日、監督は鶏冠(とさか)をピンと立てた喧嘩鶏(けんかどり)のように、工場を廻って歩いていた。「どうした、どうした！」と怒鳴り散らした。がノロノロと仕事をしているのが一人、二人でなしに、あっちでも、こつちでも殆(ほと)んど全部なので、ただイライラ歩き廻ることしか出来なかった。漁夫たちも船員もそういう監督を見るのは始めてだった。上甲板で、網から外した蟹が無数に、ガサガサと歩く昔がした。通りの悪い下水道のように、仕事がドンドンつまって行っ

た。しかし「監督の梶棒(こんぼう)」が何の役にも立たない！

仕事が終わってから、煮しまった手拭(てぬぐい)で首を拭きながら、皆ゾロゾロ「糞壺」に帰ってきた。顔を見合うと、思わず笑い出した。それが何故(なぜ)か分らずに、おかしくて、おかしくて仕様(しょう)がなかった。

それが船員の方にも移って行った。船員を漁夫とにらみ合わせて、仕事をさせ、いい加減に馬鹿をみせられていたことが分ると、彼らも時々「サボリ」出した。

「昨日ウンと働き過ぎたから、今日はサボだど。」

仕事の出しなに、誰かそういうと、皆そうになった。しかし「サボ」といっても、ただ身体を楽に使うということではしかなかったが。

誰だって身体がおかしくなっていた。イザとなったら「仕方がない」やるさ。「殺されること」はどっち道同じことだ。そんな気が皆にあった。

ただ、もうたまらなかった。

× × ×

「中積船だ！ 中積船だ！」上甲板で叫んでい

るのが、下まで聞えてきた。皆は思い思い「糞壺」の棚からボロ着のまま跳(は)ね下りた。

中積船は漁夫や船員を「女」よりも夢中にした。この船だけは塩ッ臭くない、函館の匂いがしていた。何カ月も、何百日も踏みしめたことのない、あの動かないの匂いがしていた。それに、中積船には日附の違った何通りもの手紙、シャツ、下着、雑誌などが送りとどけられていた。

彼らは荷物を蟹臭い節立った手で、鷲(わし)づかみにするとあわてたように「糞壺」にかけ下りた。そして棚に大きな安坐(あぐら)をかいて、その安坐の中で荷物を解いた。色々のもが出る。

側から母親がものをいって書かせた、自分の子供のたどたどしい手紙、歯磨、楊子(ようじ)、チリ紙、着物、それらの合せ目から、思いがけなく妻の手紙が、重さでキチンと平べったくなって、出てきた。彼らはその何処からでも、陸にある

「自家(うち)」の匂いをかぎ取ろうとした。乳臭い子供の匂いや、妻のムツとくる膚の匂(にお)いを探した。

… … … … … … … … … …

おそそにかつれて困っている、

三錢切手でとどくなら、
おそろ缶詰で送りたい かッ！

やけに大声で「ストン節」をどなった。

何んにも送って来なかった船員や漁夫は、ズボンのポケットに棒のように腕をつっこんで、歩き廻っていた。

「お前の居ない間(ま)に、男でも引ッ張り込んでるだんべよ。」

皆にからかわれた。

薄暗い隅(すみ)に顔を向けて、皆ガヤガヤ騒いでいるのをよそに、何度も指を折り直して、考え込んでいるのがいた。中積船で来た手紙で、

子供の死んだ報知(しらせ)を読んだのだった。二カ月前に死んでいた子供の、それを知らずに

「今まで」いた。手紙には無線を頼む金もなかったもので、と書かれていた。漁夫が?!と思われるほど、その男は何時までもムツつりしていた。

しかし、それとちょうど反対のがあった。ふやけた蛸(たこ)の子のような赤子の写真が入っていたりした。

「これがか!？」と、頓狂(とんきょう)な声で笑

い出してしまおう。

それから「どうだ、これが産れたんだとよ。」
と喋ってワザワザ一人一人に、ニコニコしながら
見せて歩いた。

荷物の中には何んでもないことで、しかし妻で
なかったら、やはり気付かないような細かい心配
りの分るものが入っていた。そんな時は、急に誰
でも、バタバタと心が「あやしく」騒ぎ立った。

そして、ただ、無性に帰りたかった。

中積船には、会社で派遣した活動写真隊が乗り
込んできていた。出来上っただけの缶詰を中積船
に移してしまった晩、船で活動写真を映すことにな
った。

平べったい鳥打ちを少し横めにかぶり、蝶(ち
ょう)ネクタイをして、太いズボンをはいた、若
い同じような恰好(かっこう)の男が、二、三人ト
ランクを重そうに持って、船へやってきた。

「臭い、臭い！」

そういいながら、上着を脱いで、口笛を吹きな
がら、幕をはったり、距離をはかって台を据(す)
えたりし始めた。漁夫たちはそれらの男から、何
か「海で」ないもの 自分たちのようなもので

ないもの、を感じ、それにひどく引きつけられた。船員や漁夫は何処か浮かれ気味で、彼らの仕度(したく)に手伝った。

一番年かさらしい下品に見える、太い金縁の眼鏡をかけた男が、少し離れた処に立って、首の汗を拭いていた。

「弁士さん、そつたら処(ところ)さ立ってれば、足から蚤(のみ)がハネ上って行きますよ！」

と、「ひゃアーツ！」焼けた鉄板でも踏んづけたようにハネ上った。

見ていた漁夫たちがドッと笑った。

「しかしひどい所にいるんだな！」しゃがれた、ジャラジャラ声だった。それはやはり弁士だった。

「知らないだろうけれども、この会社がここへこうやって、やって来るために、幾(いく)ら儲(もう)けていると思う？ 大したもんだ。六カ月に五百万円だよ。一年千万円だ。一口で千万円っていえば、それっ切りだけれども、大したもんだ。それに株主へ二割二分五厘なんて滅法界もない配当をする会社なんて、日本にだってそうないんだ。今度社長が代議士になるっていうし、申分がないさ。やはり、こんな風にしてもひどく

しなけアあれだけ儲けられないんだろうな。」

夜になった。

「一万箱祝」を兼ねてやることになり、酒、焼酎(しょうちゅう)、するめ、にしめ、バット、キャラメルが皆の間に配られた。

「さ、親父(おど)のどこさ来い。」 雑夫が、漁夫、船員の間、引張り凧(だこ)になった。

「安坐(あぐら)さ抱いて見せてやるからな。」

「危い、危い！ 俺のどこさ来いてば。」

それがガヤガヤしばらく続いた。

前列の方で四、五人が急に拍手した。皆も分らずに、それに続けて手をたたいた。監督が白い垂幕(たれまく)の前に出てきた。腰をのばして、両手を後に廻しながら、「諸君は」とか、「私は」とか、普段いったことのない言葉を出したり、また何時(いつ)もの「日本男児」とか、「国富」だとかいい出した。大部分は聞いていなかった。こめかみと顎(あご)の骨を動かしながら、「するめ」を嚙(か)んでいた。

「やめろ、やめろ！」後から怒鳴る。

「お前(め)えなんか、ひっこめ！ 弁士がいるんだ、ちアんと。」

「六角棒の方が似合うぞ！」 皆ドッと笑った。口笛をビュウビュウ吹いて、ヤケに手をたたいた。

監督もまさかここでは怒れず、顔を赤くして、何かいうと（皆が騒ぐので聞えなかった。）引込んだ。そして活動写真が始まった。

最初「実写」だった。宮城、松島、江ノ島、京都... が、ガタピシャと写って行った。時々切れた。急に写真が二、三枚ダブって、目まいでもしたように入り乱れたかと思うと、瞬間消えて、パッと白い幕になった。

それから西洋物と日本物をやった。どれも写真はキズが入っていて、ひどく「雨が降った」。それに所々切れているのを接合させたらしく、人の動きがギクシャクした。

しかしそんなことはどうでもよかった。皆はすっかり引き入れられていた。外国のいい身体をした女が出てくると、口笛を吹いたり、豚のような鼻をならした。弁士は怒ってしばらく説明しないこともあった。

西洋物はアメリカ映画で、「西部開拓史」を取り扱ったものだった。野蛮人の襲撃を受けた

り、自然の暴虐に打ち壊(こわ)されては、又立ち上り、一間(いっけん)々々と鉄道をのぼして行く。途中に、一夜作りの「町」が、まるで鉄道の結びコブのように出来る。そして鉄道が進む、その先きへ、先きへと町が出来て行った。そこから起る色々な苦難が、一工夫と会社の重役の娘との「恋物語」ともつれ合って、表へ出たり、裏になつたりして描かれていた。最後の場面で、弁士が声を張りあげた。

「彼等幾多の犠牲的青年によって、遂に成功するに至った延々何百哩(マイル)の鉄道は、長蛇の如く野を走り、山を貫き、昨日までの蛮地は、かくして国富と変ったのであります。」

重役の娘と、何時(いつ)の間にか紳士(しんし)のようになった工夫が相抱くところで幕だった。

間に、意味なくゲラゲラ笑わせる、短い西洋物が一本はさまった。

日本の方は、貧乏な一人の少年が「納豆売り」「夕刊売り」などから「靴磨き」をやり、工場に入り、模範職工になり、取り立てられて、一大富豪になる映画だった。弁士は字幕(タイトル)

にはなかったが、

「げに勤勉こそ成功の母ならずして、何んぞや！」といった。

それには雑夫達の「真剣な」拍手が起った。然し漁夫か船員のうちで、

「嘘(うそ)こけ！ そんだったら、俺なんて、社長になってねかならないべよ」

と大声を出したものがいた。

それで皆は大笑いに笑ってしまった。

後で弁士が、「ああいう処へは、ウンと力を入れて、繰りかえし、繰りかえしいって貰いたいて、会社から命令されて来たんだ」といった。

最後は、会社の、各所属工場や、事務所などを写したものだ。た。「勤勉」に働いている沢山の労働者が写っていた。

写真が終わってから、皆は一万箱祝いの酒で酔払った。

長い間口にしなかったのと、疲労し過ぎていたので、ベロベロに参って了(しま)った。薄暗い電気の下に、煙草の煙が雲のようにこめていた。空気がムレて、ドロドロに腐っていた。肌脱(はだぬ)ぎになったり、鉢巻をしたり、大きく安坐

をかいて、尻をすっきりまくり上げたり、大声で色々なことを怒鳴り合った。時々なぐり合いの喧嘩(けんか)が起った。

それが十二時過ぎまで続いた。

脚気(かっけ)で、何時も寝ていた函館の漁夫が、枕を少し高くして貰って、皆の騒ぐのを見ていた。同じ処から来ている友達の漁夫は、側の柱に寄りかかりながら、歯にはさまったするめを、マッチの軸で「シイ」「シイ」音をさせてせせっていた。

余程過ぎてからだった。「糞壺」の階段を南京袋のように漁夫が転がって来た。

着物と右手がすっかり血まみれになっていた。

「出刃(でば)、出刃！ 出刃を取ってくれ！」土間を這(は)いながら、叫んでいる。「浅川の野郎、何処へ行きやがった。居(い)ないんだ。殺してやるんだ。」

監督のためになぐられたことのある漁夫だった。

その男はストーヴのステッキを持って、眼の色をかえて、また出て行った。誰もそれをとめなかった。「な！」函館の漁夫は友達を見上げた。

「漁夫だって、何時も木の根っこみたいな馬鹿で

ねえんだな。面白くなるぞ！」

次の朝になって、監督の窓硝子からテーブルの道具が、すっかり滅茶苦茶に壊(こわ)されていたことが分った。監督だけは、何処(どこ)にいたのか運よく「こわされて」いなかった。

六

柔かい雨曇(くも)りだった。前の日まで降っていた。それが上りかけた頃だった。曇った空と同じ色の雨が、これもやはり曇った空と同じ色の海に、時々和(なご)やかな円るい波紋を落していた。午(ひる)過ぎ、駆逐艦がやって来た。手の空いた漁夫や雑夫や船員が、デッキの手すりに寄って、見とれながら、駆逐艦についてガヤガヤ話しあった。物めずらしかった。

駆逐艦からは、小さいボートが降ろされて、士官連が本船へやってきた。サイドに斜めに降ろされたタラップの、下のおどり場には船長、工場代表、監督、雑夫長が待っていた。ボートが横付けになると、お互に拳手の礼をして船長が先頭に上

ってきた。監督が上をひょいと見ると、眉(まゆ)と口隅をゆがめて、手を振って見せた。「何を見てるんだ。行ってる、行ってる」

「偉張んねえ、野郎！」 - ゾロゾロデッキを後のものが前を順に押しながら、工場へ降りて行った。生ッ臭い匂いが、デッキにただよって、残った。

「臭いね。」綺麗な口髭(ひげ)の若い士官が、上品に顔をしかめた。

後からついてきた監督が、周章(あわ)てて前へ出ると、何かいって、頭を何度も下げた。

皆は遠くから飾りのついた短剣が、歩くたびに尻に当って、跳ね上がるのを見ていた。どれが、どれよりも偉いとか偉くないとか、それを本気でいい合った。しまいには喧嘩(けんか)のようになった。

「ああなると、浅川も見られたもんでないな。」

監督のペコペコした恰好(かっこう)を真似(まね)して見せた。皆はそれでドッと笑った。

その日、監督も雑夫長もいないので、皆は気楽に仕事をした。唄をうたったり、機械越しに声高に話し合った。

「こんな風に仕事をさせたら、どんなもんだべな。」

皆が仕事を終えて、上甲板に上ってきた。サロンの前を通ると、中から酔払って、無遠慮に大声で喚(わめ)き散らしているのが聞えた。

給仕(ボーイ)が出てきた。サロンの中は煙草の煙でムンムンしていた。

給仕の上気した顔には、汗が一つ一つ粒になって出ていた。両手に空のビール瓶を一杯もっていた。顎(あご)で、ズボンのポケットを知らせて、「顔を頼む。」といった。

漁夫がハンカチを出してふいてやりながら、サロンを見て、「何してるんだ？」ときいた。

「イヤ、大変さ。ガブガブ飲みながら、何を話してるかっていえば　　女のアレがどうしたとか、こうしたとかよ。お蔭で百回も走らせられるんだ。農林省の役人が来れば来たでタラップからタタキ落ちるほど酔払うしな！」

「何しに来るんだべ？」

給仕は、分らんさ、という顔をして、急いでコック場に走って行った。

箸(はし)では食いづらいボロボロな南京米に、

紙ッ切れのような、実が浮かんでいる塩ッほい味噌汁で、漁夫らが飯を食った。

「食ったことも、見たことも無(ね)えん洋食が、サロンさ何んぼも行ったな。」

「糞喰えだ。」

テーブルの側の壁には、

一、飯のことで文句をいうものは、偉い人間になれぬ。

一、一粒の米を大切にせよ。血と汗の賜物(たまもの)なり。

一、不自由と苦しさに耐えよ。

振仮名(ふりがな)がついた下手な字で、ビラが貼(は)らさっていた。下の余白には、共同便所の中にあるような猥褻(わいせつ)な落書がされていた。

飯が終ると、寝るまでのちょっとした間、ストーヴを囲んだ。駆逐艦のことから、兵隊の話が出た。漁夫には秋田、青森、岩手の百姓が多かった。それで兵隊のことになると、訳が分らず、夢中になった。兵隊に行ってきたものが多かった。

彼らは、今では、その当時の残虐(ざんぎやく)に充(み)ちた兵隊の生活をかえって懐(なつか)しいものに、色々想(おも)い出していた。

皆寝てしまおうと、急に、サロンで騒いでいる音が、デッキの板や、サイドを伝って、ここまで聞えてきた。ひょいと眼をさますと、「まだやっている」のが耳に入った。

もう夜が明けるんではないか。誰か 給仕かも知れない、甲板を行ったり、来たりしている靴の踵(かかと)のコツ、コツという音がしていた。実際、そして、騒ぎは夜明けまで続いた。

士官連はそれでも駆逐艦に帰って行ったらしく、タラップは降ろされたままになっていた。そして、その段々に飯粒(めしつぶ)や蟹の肉や茶色のドロドロしたものが、ゴジャゴジャになった嘔吐(へど)が、五、六段続いて、かかっていた。嘔吐からは腐ったアルコールの臭(にお)いが強く、鼻にプーンときた。胸が思わずカアアッとくる匂いだった。

駆逐艦は翼(つばさ)をおさめた灰色の水鳥のように、見えないほどに身体をゆすって、浮かんでいた。それは身体全体が「眠り」を貪(むさぼ)っ

ているように見えた。煙筒からは煙草の煙よりも細い煙が風の無い空に、毛糸のように上っていた。

監督や雑夫長などは昼になっても起きて来なかった。

「勝手な畜生だ！」仕事をしながら、ブツブツいった。

コック部屋の隅には、粗末に食い散らされた空の蟹缶詰やビール瓶が山積みにならされていた。朝になると、それを運んで歩いたボーイ自身でさえ、よくこんなに飲んだり、食ったりしたもんだ、と吃驚(びっくり)した。

給仕は仕事の関係で、漁夫や船員などが、とても窺(うかがい)い知ることの出来ない船長や監督、工場代表などのムキ出しの生活をよく知っていた。と同時に、漁夫たちの惨(みじ)めな生活(監督は酔うと、漁夫たちを「豚奴(ぶため)豚奴」といっていた。)も、ハッキリ対比されて知っている。公平に言って、上の人間はゴウマンで、恐ろしいことを儲(もう)けのために「平気」で謀(たくら)んだ。漁夫や船員はそれにウマウマ落ち込んで行った。それは見ていられなかった。

何も知らないうちにはいい、給仕は何時もそう考

えていた。彼は、当然どうということが起るか
起こらないではないか、それが自分で分るよう
に思っていた。

二時頃だった。船長や監督らは、下手に畳んで
おいたために出来たらしい、色々な折目のついた
服を着て、缶詰を船員二人に持たして、発動機船
で駆逐艦に出掛けて行った。甲板で蟹外しをして
いた漁夫や雑夫が、手を休めずに「嫁(よめ)行列」
でも見るように、それを見ていた。

「何やるんだか、分ったもんでねえな。」

「俺たちの作った缶詰は、まるで糞紙(くそが
み)よりも粗末にしゃがる！」

「しかしな...」中年を過ぎかけている、左手
の指が三本よりない漁夫だった。「こんなところ
まで来て、ワザワザ俺たちば守っててけるんだも
の、ええさな。」

その夕方、駆逐艦が、知らないうちにムク
ムクと煙突から煙を出し初めた。デッキを急がし
く水兵が行ったり来たりし出した。そして、それ
から三十分ほどして動き出した。艦尾の旗がハタ
ハタと風にはためく音が聞えた。蟹工船では、船
長の発声で、「万歳」を叫んだ。

夕飯が終ってから、「糞壺」へ給仕がおりてきた。皆はストーヴの周囲で話していた。

薄暗い電灯の下に立って行って、シャツから虱を取っているのもいた。電灯を横切るたびに、大きな影がペンキを塗った、煤(すす)けたサイドに斜めにうつった。

「士官や船長や監督の話だけれどもな、今度ロシアの領海へこつそり潜入して漁をすそうだど。それで駆逐艦がしっきりなしに、側にいて番をしてくれるそうだ　大部、コレやってるらしいな。」(拇指(おやゆび)と人差指で円るくしてみた。)

「皆の話を聞いていると、金がそのままゴロゴロ転(ころ)がっているようなカムサッカや北樺太など、この辺一帯を行く行くはどうしても日本のものにするそうだ。日本のアレは支那(しな)や満洲(まんしゅう)ばかりでなしに、こっちの方面も大切だっていうんだ。それにはここの会社が三菱などと一緒になって、政府をウマクつつついているらしい。今度社長が代議士になれば、もっとそれをドンドンやるようだど。

「それでさ、駆逐艦が蟹工船の警備に出動する

といったところで、どうしてどうして、そればかりの目的でなくて、この辺(あたり)の海、北樺太、千島の附近まで詳細に測量したり気候を調べたりするのが、かえって大目的で、万一のアレに手ぬかりなくする訳だな。これア秘密だろうと思うんだが、千島の一番端の島に、コッソリ大砲を運んだり、重油を運んだりしているそうさ。」

「俺初めて聞いて吃驚(びっくり)したんだけれどもな、今までの日本のどの戦争でも、本当は

底の底を割ってみれば、みんな二人か三人の金持の(そのかわり大金持の)指図で、動機だけは色々にごじつけて起したもんだとよ。何んしろ見込のある場所を手に入れたくて、手に入れたくてパタパタしてるんだそうだからな、そいつらは。危いそうさ。」

七

ウインチがガラガラとなって、川崎船が下がってきた。ちょうどその下に漁夫が四人ほど居て、ウインチの腕が短いので、下りてくる川崎船をデッキの外側に押してやって、海までそれが下りれ

るようにしてやっていた。よく危いことがあった。ボロ船のウインチは、脚気(かっけ)の膝(ひざ)のようにギクシャクとしていた。ワイヤーを巻いている歯車の工合で、グイと片方のワイヤーだけが跛(びっこ)にのびる。川崎船が燻製鯿(くんせいにしん)のように、すっかり斜めにブラ下がってしまうことがある。その時、不意を喰(く)らって、下にいた漁夫がよく怪我(けが)をした。その朝それがあった。「あッ、危い！」誰か叫んだ。真上からタタキのめされて、下の漁夫の首が胸の中に、杭(くい)のように入り込んでしまった。

漁夫らは船医のところへ抱(かか)えこんだ。彼らのうちで、今ではハッキリ監督などに対し「畜生！」と思っている者らは、医者に「診断書」を書いて貰(もら)うように頼むことにした。監督は蛇(へび)に人間の皮をきせたような奴だから何んとかキット難くせを「ぬかす」に違いなかった。その時の抗議のために診断書は必要だった。それに船医は割合漁夫や船員に同情を持っていた。

「この船は仕事をして怪我(けが)をしたり、病気になったりするよりも、ひッぱたかれたり、た

たきのめされたりして怪我したり、病氣したりする方が、ずウツと多いんだからねえ。」と驚いていた。一々日記につけて後の証拠(しょうこ)にしなければならぬ、といていた。それで、病氣や怪我をした漁夫や船員などを割合に親切に見てくれていた。診断書を作って貰いたいんですけれども、一人が切り出した。

初め、吃驚(びっくり)したようだった。

「さあ、診断書はねえ... ..」

「この通りに書いて下さればいいんですが。」
はがゆかった。

「この船では、それを書かせないことになってるんだよ。勝手にそう決めたらしいんだが。... ..
後々のことがあるんでね。」

気の短い、吃(ども)りの漁夫が「チェッ」と舌打(したう)ちをしてしまった。

「この前、浅川君になぐられて、耳が聞えなくなった漁夫が来たので、何気なく診断書を書いてやったら、飛んでもないことになってしまっただけね。」

それが何時までも証拠になるんで、浅川君にしちゃね... ..」

彼らは船医の室を出ながら、船医もやはりそこ

まで行くと、もう「俺たち」の味方でなかったことを考えていた。

その漁夫は、しかし「不思議に」どうにか生命を取りとめることが出来た。その代り、日中でもよく何かにつまずいて、のめるほど暗い隅(すみ)に転がったまま、その漁夫がうなっているのを、何日も何日も聞かされた。

彼が直りかけて、うめき声が皆を苦しめなくなった頃、前から寝たきりになっていた脚気(かっけ)の漁夫が死んでしまった。 二十七だった。

東京、日暮里(にっぽり)の周旋屋から来たもので、一緒の仲間が十人ほどいた。しかし、監督は次の日の仕事に差支えるというので、仕事に出ていない「病気のものだけ」で、「お通夜」をさせることにした。湯灌(ゆかん)してやるために、着物を解いてやると、身体からは、胸がムカーッとする臭気がきた。そして不気味な真白い、平べったい虱が周章(あわ)ててゾロゾロ走り出した。鱗形(うるこがた)に垢(あか)のついた身体全体は、まるで松の幹が転がっているようだった。胸は、肋骨(ろっこつ)が一つ一つムキ出しに出ていた。脚気がひどくなってから、自由に歩けなかったので、

小便などはその場でもらしたらしく、一面ひどい臭気だった。禪(ふんどし)もシャツも赭黒(あかぐる)く色が変わって、つまみ上げると、硫酸(りゅうさん)でもかけたように、ボロボロにくずれそうだった。臍(へそ)の窪(くぼ)みには、垢とゴミが一杯につまって、臍(へそ)は見えなかった。肛門(こうもん)の周(まわ)りには、糞(くそ)がすっかり乾いて、粘土(ねんど)のようにこびりついていた。

「カムサッカでは死にたくない。」 彼は死ぬ時そう言ったそうだった。しかし、今彼が命を落すというとき、側にキット誰も看(み)てやった者がいなかったかも知れない。そのカムサッカでは誰だって死にきれないだろう。漁夫たちはその時の彼の気持を考え、中には声をあげて泣いたものがいた。

湯灌に使うお湯を貰いにゆくと、コックが、「可哀相にな。」といった。「沢山(たくさん)持って行ってくれ。随分、身体が汚れてるべよ。」

お湯を持ってくる途中、監督に会った。

「何処へ持ってゆくんか。」

「湯灌よ。」

という、

「ぜいたくに使うな。」まだ何かいいたげにして通って行った。

帰ってきたとき、その漁夫は、「あの時ぐらい、いきなり後から彼奴(あいつ)の頭に、お湯をブツかけてやりたくなかった時はなかった！」といった。興奮して、身体をブルブル顛(ふる)わせた。

監督はしつこく廻ってきては、皆の様子を見て行った。しかし、皆は明日居睡(いねむ)りをして、のめりながら仕事をして、例の「サボ」をやっても、皆で「お通夜(つや)」をしようということにした。そう決った。

八時頃になって、ようやく一通りの用意が出来、線香(せんこう)や蠟燭(ろうそく)をつけて、皆がその前に坐った。監督はとうとう来なかった。船長と船医が、それでも一時間ぐらい坐っていた。片言のように切れ切れに、お経の文句を覚えていた漁夫が「それでいい、心が通じる」そう皆にいわれて、お経をあげることになった。お経の間、シーンとしていた。誰か鼻をすすり上げている。終りに近くなるとそれが何人にも殖(ふ)えて行った。

お経が終ると、一人一人焼香(しょうこう)をした。それから坐を崩して、各々一かたまり、一かたまりになった。仲間の死んだことから、生きている　しかし、よく考えてみればまるで危く生きている自分たちのことに、それらの話になった。船長と船医が帰ってから、吃(ども)りの漁夫が線香とローソクの立っている死体の側のテーブルに出て行った。

「僕はお経は知らない。お経をあげて山田君の霊を慰めてやることは出来ない。しかし僕はよく考えて、こう思うんです。山田君はどんなに死にたくなかったべか、とな。イヤ、本当のことをいえば、どんなに殺されたくなかったか、と。確かに山田君は殺されたのです。」

聞いている者たちは、抑えられたように静かになった。

「では、誰が殺したか？　　いわなくたって分っているべよ！　僕はお経でもって、山田君の霊を慰めてやることは出来ない。しかし僕らは、山田君を殺したものの仇(かたき)をとることによって、とることによって、山田君を慰めてやる事が出来るのだ。　この事を、今こそ、山田君

の靈に僕らは誓わなければならないと思う... ..。」

船員たちだった、一番先きに「そうだ」といったのは。

蟹の生ッ臭いにおいと人いきれのする「糞壺」の中に線香のかおりが、香水か何かのように、ただよった。九時になると、雑夫が帰って行った。疲れているので、居眠りをしているものは、石の入った俵(たわら)のようになかなか起き上らなかつた。ちょっとすると、漁夫たちも一人、二人と眠り込んでしまった。波が出てきた。船が揺れるたびに、ローソクの灯が消えそうに細くなり、またそれが明るくなったりした。死体の顔の上にかけてある白木綿が除(と)れそうに動いた。ずつた。そこだけ見ていると、ゾツとする不気味さを感じた。サイドに、波が鳴り出した。

次の朝、八時過ぎまで一仕事をしてから、監督のきめた船員と漁夫だけ四人下へ降りて行った。お経を前の晩の漁夫に読んでもらってから、四人の外に、病気のもの三、四人で、麻袋に死体をつめた。麻袋は新しいものは沢山あったが、監督は、直(す)ぐ海に投げるものに新しいものを使うなんてぜいたくだ、と行ってきかなかつた。線香はも

う船には用意がなかった。

「可哀相なもんだ。　　これじゃ本当に死にたくなかったべよ。」

なかなか曲がらない腕を組合わせながら、涙を麻袋(あさぶくろ)の中に落した。

「駄目(だめ)駄目。涙をかけると... ..」

「何んとかして、函館まで持って帰られないものかな。... ..こら、顔をみれ、カムサツカのしゃっこい水さ入りたくねえっていつてるんでないか。

海さ投げられるなんて、頼りねえな... ..」

「同じ海でもカムサツカだ。冬になれば　　九月過ぎれば、船一艘(ソウ)も居なくなつて、凍つてしまう海だ。北の北の端(はず)れの！」

「ん、ん。」　　泣いていた。「それによ、こうやって袋に入れるっていうのに、たった六、七人でな。三、四百人もいるのによ！」

「俺たち、死んでからも、碌(ろく)な目に合わないんだ... ..」

皆は半日でいいから休みにしてくれるように頼んだが、前の日から蟹の大漁で、許されなかった。

「私事と公事を混同するな。」監督にそういわれた。

監督が「糞壺」の天井から顔だけ出して、

「もういいか。」ときいた。

仕方がなく彼らは「いい。」といった。

「じゃ、運ぶんだ。」

「んでも、船長さんがその前に弔詞(ちょうじ)を
読んでくれることになってるんだよ。」

「船長オ？ 弔詞イ？ 」嘲(あざ)けるように、
「馬鹿！ そんな悠長(ゆうちょう)なことしてれるか。」

悠長なことはしていられなかった。蟹が甲板に山積みになって、ゴソゴソ爪で床をならしていた。

そして、どんどん運び出されて、鮭(さけ)か鱒(ます)の菰包(こもつづ)みのように無雑作に、船尾につけてある発動機に積み込まれた。

「いいか？」

「よオし... ..」

発動機がバタバタ動き出した。船尾で水が掻(か)き廻されて、アブクが立った。

「じゃ... ..」

「じゃ。」

「左様(さよう)なら。」

「淋(さび)しいけどな 我慢してな。」低い

声でいっている。

「じゃ、頼んだど！」

本船から、発動機に乗ったものに頼んだ。

「ん、ん、分った。」

発動機は沖の方へ離れて行った。

「じゃ、な！ … …。」

「行ってしまった。」

「麻袋の中で、行くのはイヤだ、イヤだってしてるようでな … … 眼に見えるようだ。」

漁夫が漁から帰ってきた。そして監督の

「勝手な」処置をきいた。それを聞くと、怒る前に、自分が 屍体(したい)になった自分の身体が、底の暗いカムサツカの海に、そういうように蹴落(けおと)されでもしたように、ゾツとした。皆はものもいえず、そのままゾロゾロタラップを下りて行った。「分った、分った。」口のなかでブツブツいいながら、塩ぬれのドツたりした袷天(はんてん)を脱いだ。

表には何も出さない。気付かれないように手をゆるめて行く。監督がどんなに思いっ切り怒鳴り散らしても、タタキつけて歩いても、口答えもせず「おとなしく」している。それを一日置きに繰り返かえす。(初めは、おっかなびっくり、おっかなびっくりでしていたが。) そういうようにして、「サボ」を続けた。水葬(すいそう)のことがあってから、モットその足並が揃(そろ)ってきた。

仕事の高は眼の前で減って行った。

中年過ぎた漁夫は、働かされると、一番それが身にこたえるのに、「サボ」にはイヤな顔を見せた。しかし内心(心配していたことが起らずに、不思議でならなかったが)、かえって「サボ」が効(き)いてゆくを見ると、若い漁夫たちのいうように、動きかけてきた。困ったのは、川崎の船頭だった。彼らは川崎のことでは全責任があり、監督と平漁夫の間に居り、「漁獲(ぎょかく)高」のことでは、すぐ監督に当って来られた。それで何よりつらかった。結局三分の一だけ「仕方なしに」漁夫の味方をして、後の三分の二は監督の小さい「出店」その小さい「」だった。

「それア疲れるさ。工場のようにキチン、キチンと仕事がきまってるわけには行かないんだ。相手は生物(いきもの)だ。蟹が人間様に都合よく、時間時間に出てきてはくれないしな。仕方がないんだ。」 そっくり監督の蓄音機(ちくおんき)だった。

こんなことがあった。 糞壺(くそつぼ)で、寝る前に、何かの話が思いがけなく色々の方へ移って行った。その時ひょいと、船頭が威張(いば)ったことをいってしまった。それは別に威張ったことではないが、「平」漁夫にはムツときた。相手の平漁夫が、そして、少し酔っていた。

「何んだって？」いきなり怒鳴った。「手前(てめ)え、何んだ。あまり威張ったことをいわねえ方がええんだで。漁に出たとき、俺たち四、五人でお前(め)えを海の中さタタキ落すぐらい朝飯前だんだ。 それッ切りだべよ。カムサッカだど。お前えがどうやって死んだって、誰が分るッて！」

そうはいったものはない。それをガラガラな大声でどなり立ててしまった。誰も何もいわない。今まで話していた外のことも、そこでフッ切れて

しまった。

しかし、こういうようなことは、調子よく跳(は)ね上った空元気(からげんき)だけの言葉ではなかった。それは今まで「屈従(くつじゆう)」しか知らなかった漁夫を、全く思いがけずに背から、とてつもない力で突きのめした。突きのめされて、漁夫は初め戸惑(とまど)いをしたようにウロウロした。

それが知られずにいた自分の力だ、ということ
を知らずに。

そんなことが「俺たちに」出来るんだろうか？
しかしなるほど出来るんだ。

そう分ると、今度は不思議な魅力になって、反抗的な気持が皆の心に喰い込んで行ってしまった。今まで、残酷極まる労働で搾(しぼ)り抜かれていた事が、かえってそのためにはこの上ない良い地盤だった。こうなれば、監督も糞もあつたものでない！皆愉快(ゆかい)がった。一旦この気持をつかむと、不意に、懐中電灯を差しつけられたように、自分たちの蛆虫(うじむし)そのままの生活がアリアリと見えてきた。

「威張んな、この野郎」この言葉が皆の間で流

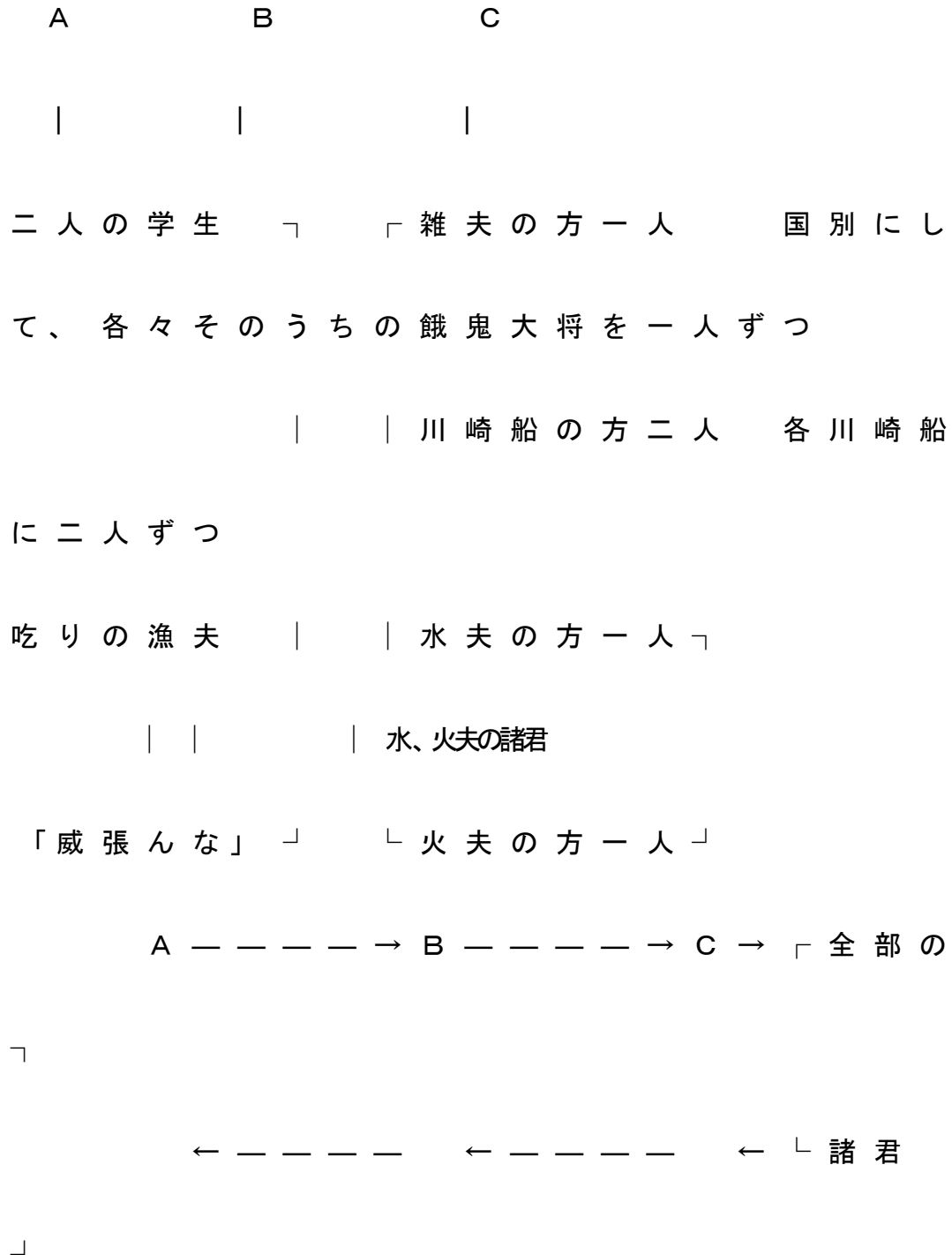
行(はや)り出した。何かすると「威張んな、この野郎」といった。別なことにでも、すぐそれを使った。威張る野郎は、しかし漁夫には一人もいなかった。

それと似たことが一度、二度となくある。そのたびごとに漁夫たちは「分って」行った。そして、それが重なってゆくうちに、そんな事で漁夫らの中から何時でも表の方へ押し出されてくる、きまった三、四人が出来てきた。それは誰かが決めたのではなく、本当はまた、きまったのでもなかった。ただ、何か起ったりまたしなければならなくなったりすると、その三、四人の意見が皆のと一致したし、それで皆もその通り動くようになった。

学生上りが二人ほど、吃(ども)りの漁夫、「威張んな」の漁夫などがそれだった。

学生が鉛筆をなめ、なめ、一晩中腹這(はらば)いになって、紙に何か書いていた。それは学生の「発案」だった。

発案（責任者の図）



学生はどんなもんだいといった。どんな事がAか

ら起ろうが、Cから起ろうが、電気より早く、ぬかりなく「全体の問題」にすることが出来る、と威張った。それが、そして一通りきめられた。

実際は、それはそう容易（たやす）くは行われなかったが。「殺されたくないものは来れ！」

その学生上りの得意の宣伝語だった。毛利元就（もうりもとなり）の弓矢を折る話や、内務省かのポスターで見たことのある「綱引き」の例をもってきた。

「俺たち四、五人いれば、船頭の一人ぐらい海の中へタタキ落すなんか朝飯前だ。元気を出すんだ。」

「一人と一人じゃ駄目だ。危い。だが、あっちは船長から何からを皆んな入れて十人にならない。ところがこっちは四百人に近い。四百人が一緒になれば、もうこっちのものだ。十人に四百人！相撲（すもう）になるなら、やってみろ、だ。」そして最後に「殺されたくないものは来れ！」だった。どんな「ボンクラ」でも「飲んだくれ」でも、自分たちが半殺しにされるような生活をさせられていることは分っていたし、（現に、眼の前で殺されてしまった仲間のいることも分ってい

る。) それに、 苦しまぎれにやったチョコチョコした「サボ」が案外効き目があったので学生上りや吃りのいうことも、よく聞き入れられた。

一週間ほど前の大嵐で、発動機船がスクリュウを毀(こわ)してしまった。それで修繕のために、雑夫長が下船して、四、五人の漁夫と表に陸へ行った。帰ってきたとき、若い漁夫がゴッソリ日本文字で印刷した「赤化宣伝」のパンフレットやビラを沢山(たくさん)持ってきた。

「日本人が沢山こういうことをやっているよ。」
と聞いた。自分たちの賃金(ちんぎん)や、労働時間の長さのことや、会社のゴッソリした金儲けのことや、ストライキのことなどが書かれているので、皆は面白がって、お互に読んだり、ワケを聞き合ったりした。しかし、中にはそれに書いてある文句に、かえって反発(はんぱつ)を感じて、こんな恐ろしいことなんか「日本人」に出来るか、というものがいた。が、「俺アこれが本当だと思っただが。」と、ビラを持って学生上りのところへ訊(き)きに来た漁夫もいた。

「本当だよ、少し話大きいどもな。」

「んだって、こうでもしなかったら、浅川の性

(しよ) ツ骨(ぼね) 直るかな。」と笑った。

「それに、彼奴(あいつ)らからはモットひどいめに合わされてるから、これで当り前だべよ！」

漁夫たちは、飛んでもないものだ、といいながら、その「赤化運動」に好奇心を持ち出していた。

嵐の時もそうだが、霧が深くなると、川崎船を呼ぶために、本船では絶え間なしに笛を鳴らした。巾(はば) 広い牛の啼声(なきごえ) のような汽笛が、水のように濃くこめた霧の中を一時間も二時間もなつた。しかしそれでも、うまく帰って来れない川崎船があった。ところが、そんな時、仕事の苦しさからワザと見当を失った振(ふ)りをして、カムサツカに漂流したものがあつた。秘密に時々あつた。ロシアの領海内に入って、漁をするようになってから、予(あらかじ)め陸に見当をつけて置くと、案外容易く、その漂流が出来た。その連中も「赤化」のことを聞いてくるものがあつた。

何時でも会社は漁夫を雇うのに細心の注意を払つた。募集地の村長さんや、署長さんに頼んで「模範青年」を連れてくる。労働組合などに関心のない、いいなりになる労働者を選ぶ。「

、 、 、 、 、
抜け目なく」 万事好都合に！ 、 、 　しかし、蟹工船の
「仕事」は、今ではちょうど逆に、それらの労働
者を団結　組織させようとしていた。いくら
「抜け目のない」資本家でも、この不思議な行方
までには気付いていなかった。それは、皮肉にも、
未組織の労働者、手のつけられない「飲んだくれ」
労働者をワザワザ集めて、団結することを教えて
くれているようなものだった。

九

監督は周章（あわ）て出した。

漁期の過ぎてゆくその毎年の割に比べて、蟹の
高はハッキリ減っていた。他の船の様子をきいて
みても、昨年よりはもっと成績がいいらしかった。
二千函（ばこ）は遅れている。

監督は、これまでのように「お釈迦（しゃか）
様」のようにしていたって駄目だ、と思った。

本船は移動することにした。監督は絶えず無線
電信を盗みきかせ、他の船の網でもかまわずドン
ドン上げさせた。二十海湊（かいり）ほど南下し

て、最初に上げた渋網には、蟹がモリモリと網の目に足をひっかけてかかっていた。たしかに××丸のものだった。「君のお蔭だ。」と、彼は監督らしくなく、局長の肩をたたいた。

網を上げている所を見付けられて、発動機が放々の態（てい）で逃げてくることもあった。他船の網を手当り次第に上げるようになって、仕事が尻上りに忙がしくなった。

仕事を少しでも怠（なま）けたと見るときには、
、
大焼きを入れる。

組をなして怠けたものにはカムサッカ体操をさせる。

罰として賃金棒引き、函館へ帰ったら、警察に引き渡す。

いやしくも監督に対し、少しの反抗を示すときは銃殺されるものと思うべし。

浅川 監督

雑 夫 長

この大きなピラが工場の降り口に貼（は）られ

た。監督は弾をつめッ放しにしたピストルを始終持っていた。飛んでもない時に、皆の仕事をしている頭の上で、鷗（かもめ）や船の何処かに見当をつけて、「示威運動」のように打った。ギョツとする漁夫を見て、ニヤニヤ笑った。それは全く何かの拍子に「本当に」打ち殺されそうな不気味な感じを皆にひらめかした。

水夫、火夫も完全に動員された。勝手に使いまわされた。船長はそれに対して一言もいえなかった。船長は「看板」になってさえいれば、それで立派な一役だった。前にあったことだった。領海内に入って漁をするために、船を入れるように船長が強要された。船長は船長としての公の立場から、それを犯すことは出来ないと頑張（がんば）った。

「勝手にしやがれ -」ぬ「頼まないや！」と行って、監督らが自分たちで、船を領海内に転錨（てんびょう）さしてしまった。ところが、それが露国の監視船に見付けられて、追跡された。そして訊問（じんもん）になり、自分がしどろもどろになると、「卑怯（ひきょう）」にも退却してしまった。「そういう一切のことは、船としては勿

論（もちろん）船長がお答えすべきですから ...
...。」無理矢理に押しつけてしまった。全く、この看板は、だから必要だった。それだけでよかった。

そのことがあってから、船長は船を函館に帰そうと何遍も思った。が、それをそうさせない力が資本家の力が、やっぱり船長をつかんでいた。

「この船全体が会社のものなんだ、分ったか！」
ウァハハハハハハと、口を三角にゆがめて、背のびするように、無遠慮に大きく笑った。「糞壺」に帰ってくると、吃（ども）りの漁夫は仰向けにでんぐり返った。残念で、残念で、たまらなかった。漁夫たちは、彼や学生などの方を気の毒そうに見るが、何もいえないほどぐっしゃりつぶされてしまっていた。学生の作った組織も反古（ほご）のように、役に立たなかった。それでも学生は割合に元気を保っていた。

「何かあったら跳（は）ね起きるんだ。その代り、その何かをうまくつかむことだ。」といった。

「これでも跳ね起きられるかな。」 威張んなの漁夫だった。

「かな？ 馬鹿。こっちは人数が多いんだ。」

恐れることはないさ。それに彼奴（あいつ）らが無茶なことをすればするほど、今のうちこそ内へ、内へともっているが、火薬よりも強い不平と不満が皆の心の中に、つまりにいいだけつまっているんだ。俺はそいつを頼りにしているんだ。」

「道具立てはいいな。」威張んなは「糞壺」の中をグルグル見廻して、

「そんな奴らがいるかな。どれも、これも… ……。」

愚痴（ぐち）ッぽくいった。

「俺達から愚痴ッぽかったら　　もう、最後だよ」

「見れ、お前えだけだ、元気のええのア。今度事件起してみれ、生命（いのち）がけだ。」

学生は暗い顔をした。「そうさ… …。」といった。

監督は手下を連れて、夜三回まわってきた。三、四人固っていると、怒鳴りつけた。

それでも、まだ足りなく、秘密に自分の手下を「糞壺」に寝らせた。

「鎖」が、ただ眼に見えないだけの違いだった。皆の足は歩くときには、吋（インチ）太（ぶ

と)の鎖を現実には後に引きずっているように重かった。

「俺ア、キット殺されるべよ。」

「ん。んでも、どうせ殺されるって分ったら、その時アやるよ。」

芝浦の漁夫が、「馬鹿！」と、横から怒鳴りつけた。「殺されるって分ったら？ 馬鹿ア、何時(いつ)だ、それア。 - 今、殺されているんでねえか。小刻みによ。彼奴らはな、上手なんだ。ピストルは今にもうつように、何時でも持っているが、なかなかそんなへまはしないんだ。

あれア「手」なんだ。 分るか。彼奴らは、俺たちを殺せば、自分らの方で損するんだ。目的は 本当の目的は、俺たちをウンと働かせて、締木(しめぎ)にかけて、ギイギイ搾(しぼ)り上げてしこたま儲けることなんだ。そいつを今俺たちは毎日やられてるんだ。 どうだ、この滅茶苦茶(めちゃくちゃ)は。まるで蚕(かいこ)に食われている桑(くわ)の葉のように、俺たちの身体が殺されているんだ。」

「んだな！」

「んだな、も糞(くそ)もあるもんか。」 厚い

掌（てのひら）に、煙草（たばこ）の火を転がした。「ま、待ってくれ、今に、畜生！」

あまり南下して、身体（がら）の小さい女蟹ばかり多くなったので、場所を北の方へ移動することになった。それで皆は残業をさせられて、少し早目に（久し振りに！）仕事が終わった。

皆が「糞壺」に降りて来た。

「元気がねえな。」芝浦だった。

「こら、足ば見てくれや。ガク、ガクツつて、段ば降りれなくなったで。」

「気の毒だ。それでもまだ一生懸命働いてやるってんだから。」

「誰が！ 仕方ねえんだべよ。」、、、、

芝浦が笑った。「殺される時も、仕方がねえか。」

「... ..」

「まあ、このまま行けば、お前ここ四、五日だな。」

相手は拍子に、イヤな顔をして、黄色ッぼくムクンだ片方の頬（ほほ）と眼蓋（まぶた）をゆがめた。そして、だまって自分の棚のところへ行くと、端へ膝（ひざ）から下の足をプラ下げて、関

節を掌刀（てがたな）でたたいた。

下で、芝浦が手を振りながら、しゃべっていた。吃りが、身体をゆすりながら、相槌（あいづち）を打った。

「... .. いいか、まア仮りに金持が金を出して作ったから、船があるとしてもいいさ。水夫と火夫がいなかったら動くか。蟹が海の底に何億っているさ。仮りにだ、色々な仕度（したく）をして、ここまで出掛けてくるのに、金持が金を出せたからとしてもいいさ。俺たちが働かなかったら、一匹の蟹だって、金持の懐（ふところ）に入っていくか。いいか、俺たちがこの一夏ここで働いて、それで一体どのくらい金が入ってくる。ところが、金持はこの船一艘（そう）で純手取り四、五十万円って金をせしめるんだ。さあ、んだら、その金の出所だ。

無から有は生ぜじだ。分るか。なア、みんな俺たちの力さ。んだから、そう今にもお陀仏（だぶつ）するような不景気な面（つら）してるなっていうんだ。うんと威張るんだ。底の底のことになれば、うそでない、あっちの方が俺たちをおっかながってるんだ、ビクビクすんな。

水夫と火夫がいなかったら、船は動かないんだ。

労働者が働かねば、ビター文だって、金持の懐にゃ入らないんだ。さっきいった船を買ったり、道具を用意したり、仕度をする金も、やっぱり他の労働者が血をしばって、儲けさせてやった俺たちからしばり取って行きやがった金なんだ。

金持と俺たちとは親と子なんだ... ..」

監督が入ってきた。

皆ドマついた恰好（かっこう）で、ゴソゴソし出した。

十

空気が硝子（ガラス）のように冷たくて、塵（ちり）一本なく澄んでいた。二時で、もう夜が明けていた。カムサッカの連峰が金紫色に輝いて、海から二、三寸ぐらいの高さで、地平線を南に長く走っていた。小波（さざなみ）が立って、その一つ一つつの面が、朝日の一つ一つうけて、夜明けらしく、寒々と光っていた。それが入り乱れて砕（くだ）け、入り交れて砕ける。その

度にキラキラ、と光った。鷗（かもめ）の囁声（ささやきごえ）が（何処にいるのか分らずに、）声だけしていた。

さわやかに、寒かった。荷物にかけてある、油のにじんだズックのカヴァが時々ハタハタとなった。分らないうちに、風が出てきていた。

祥天（はんてん）の袖に、カガシのように手を通しながら、漁夫が段々を上ってきて、ハッチから首を出した。首を出したまま、はじかれたように叫んだ。

「あ、兎（うさぎ）が飛んでる。これァ大暴風（しけ）になるな。」

三角波が立ってきていた。カムサツカの海に慣れている漁夫には、それが直（す）ぐ分る。

「危ねえ、今日休みだべ。」

一時間ほどしてからだった。

川崎船を降ろすウインチの下で、そこ、ここ七、八人ずつ漁夫が固まっていた。川崎船はどれも半降ろしになったまま、途中で揺れていた。肩をゆすりながら海を見て、お互いい合っている。ちょっとした。

「やめたやめた！」

「糞（くそ）でも喰（くら）え、だ！」

誰かキッカケにそういうのを、皆は待っていたようだった。

肩を押し合って、「おい、引き上げるべ！」と
いった。

「ん。」

「ん、ん！」

一人がしかめた眼差（まなざし）で、ウインチを見上げて「しかしな... ..。」と躊躇（ため）らっている。

行きかけたのが、自分の片肩をグイとしやくつて、「死にたかったら、独（ひと）りで行（え）げよ！」と、ハキ出した。

皆は固って歩き出した。誰か「本当にいいかな。」と、小声でいていた。二人ほど、あやふやに、遅れた。

次のウインチの下にも船夫たちは立ちどまったままでいた。彼らは第二号川崎の連中が、こっちに歩いてくるのを見ると、その意味が分った。四、五人が声をあげて手を振った。

「やめだ、やめだ！」

「ん、やめだー」

その二つが合わさると、元気が出てきた。どうしようか分らないでいる遅れた二三人は、まぶしそうに、こつちを見て、立ち止っていた。皆が第五川崎のところで、また一緒になった。それらを見ると、遅れたものはブツブツいいながら後から、歩き出した。

吃りの漁夫が振りかえって、大声で呼んだ。

「しっかりせッ」

雪だるまのように、漁夫たちのかたまりがコブをつけて、大きくなって行った。皆の前や後を、学生や吃りが行ったり、来たり、しきりなしに走っていた。「いいか、はぐれないことだど！何よりそれだ。もう、大丈夫だ。もう　　！」

煙筒の側に、車座に坐って、ロープの繕（つくろ）いをやっていた水夫が、のび上って、

「どうした。オ　　イ？」と怒鳴った。

皆はその方へ手を振りあげて、ワーッと叫んだ。上から見下している水夫たちには、それが林のように揺れて見えた。

「よオし、さ、仕事なんてやめるんだ！」

ロープをさっさと片付け始めた。「待ってたんだ！」

そのことが漁夫たちの方にも分った。二度、ワ
アーッと叫んだ。

「まず糞壺（くそつぼ）さ引きあげるべ。そう
するべ。非道（ひで）え奴だ。ちゃんと大暴風
（しけ）になること分っていて、それで船を出さ
せるんだからな。一人殺しだべ！」

「あつたら奴に殺されて、たまるけア！」

「今度こそ、覚えてれ！」

殆んど一人も残さないで、糞壺へ引きあげてき
た。中には「仕方なしに」随（つ）いて来たもの
もいるにはいた。

皆のドカドカッと入り込んできたのに、薄
暗いところに寝ていた病人が、吃驚（びっくり）し
て板のような上半身を起した。ワケを話してやる
と、見る見る眼に涙をにじませて何度も、何度も
頭を振ってうなずいた。

吃りの漁夫と学生が、機関室の縄梯子（なわば
しご）のようなタラップを下りて行った。急いで
いた。慣れていないので、何度も足をすべらして、
危く、手で吊（つり）下った。中はボイラーの熱で
ムンとして、それに暗かった。彼らはすぐ身体中
汗まみれになった。汽缶（かま）の上のストーヴ

のロストルのような上を渡って、またタラップを下った。下で何か声高（こわだか）にしゃべっているのが、ガン、ガンと反響していた。地下何百尺という地獄のような豎坑（たてこう）を初めて下りて行くような不気味さを感じた。

「これもつれえ仕事だな。」

「んよ、それにまた、か、甲板さ引っぱり出されて、か、蟹たたきでも、さ、されたら、たまったもんでねえさ。」

「大丈夫、火夫も俺たちの方だ！」

「ん、大丈夫！」

ボイラーの腹を、タラップで下りていた。

「熱い、熱い、たまんねえな。人間の燻製（くんせい）が出来そうだ。」

「冗談じゃねえど。今火たいていねえ時で、こんだんだど。燃（た）いてる時なんて！」

「んか、な。んだべな。」

「印度（インド）の海渡る時ア、三十分交代で、それでヘナヘナになるんだとよ。ウツカリ文句をぬかした一機が、シャベルでたたきのめされて、あげくの果て、ボイラーに燃かれてしまうことがあるんだとよ。そうでもしたくなるべよ！」

「んな … …」

汽缶（かま）の前では、石炭カスが引き出されて、それに水でもかけたらしく、濠々（もうもう）と灰が立ちのぼっていた。その側で、半分裸の火夫たちが、煙草をくわえながら、膝（ひざ）を抱えて話していた。薄暗い中で、それはゴリラがうずくまっているのと、そっくりに見えた。石炭庫の口が半開きになって、ひんやりした真暗な内を、不気味に覗（のぞ）かせていた。

「おい。」吃りが声をかけた。

「誰だ？」上を見上げた。それが「誰だ誰だ、誰だ」と三つぐらいに響きかえって行く。

そこへ二人が降りて行った。二人だということが分ると、

「間違ったんでねえか、道を。」と、一人が大声をたてた。

「ストライキやったんだ。」

「ストキがどうしたって？」

「ストキでねえ、ストライキだ。」

「やったか！」

「そうか。このまま、どんどん火でもブツ燃

(た)いて、函館さ帰ったらどうだ。面白いど。」
吃りは「しめた！」と思った。

「んで、皆勢揃(せいぞろ)えした所で、畜生
らにねじ込もうっていうんだ。」

「やれ、やれ！」

「やれやれじゃねえ。やろう、やろうだ。」
学生が口を入れた。

「んか、んか、これア悪かった。 やろうや
ろう！」火夫が石炭の灰で白くなっている頭をか
いた。

皆笑った。

「お前たちの方、お前たちですっかり一纏(まと)
めにしてもらいたいんだ。」

「ん、分った。大丈夫だ。何時でも一つぐれえ、
ブンなぐってやりてえと思ってる連中ばかりだか
ら。」

火夫の方はそれでよかった。

雑夫たちは全部漁夫のところに連れ込まれた。
一時間ほどするうちに、火夫と水夫も加わってき
た。皆甲板に集った。「要求条項」は、吃り、学
生、芝浦、威張んなが集ってきめた。それを皆の
面前で、彼らにつきつけることにした。

監督たちは、漁夫らが騒ぎ出したのを知ると
それからちっとも姿を見せなかった。

「おかしいな。」

「これア、おかしい。」

「ピストル持ってたって、こうなったら駄目だ
べよ。」

吃りの漁夫が、ちょっと高いところに上った。
皆は手を拍(たた)いた。

「諸君、とうとう来た！ 長い間、長い間俺た
ちは待っていた。俺たちは半殺しにされながらも、
待っていた。今に見ろ、と。しかし、とうとう来
た。

「諸君、まず第一に、俺たちは力を合わせるこ
とだ。俺たちは何があろうと、仲間を裏切らない
ことだ。これだけさえ、しつかりつかんでいれば、
彼奴(あいつ)ら如きをモミつぶすは虫ケラより
容易(たやす)いことだ。 　　そんならば、第二
には何か。諸君、第二にも力を合わせることだ。
落伍者を一人も出さないということだ。一人の裏
切者、一人の寝がえり者を出さないということだ。
たった一人の寝がえりものは、三百人の命を殺す
という事を知らなければならない。一人の寝がえ

たとき、「俺何しゃべったかな？」と仲間にきいた。学生が肩をたたいて、「いい、いい。」といて笑った。

「お前えだ、悪いのァ。別にいたのによ、俺でなくたって... ..」

「皆さん、私たちは今日の来るのを待っていたんです。」 壇には十五、六歳の雑夫が立っていた。「皆さんも知っている、私たちの友達がこの工船の中で、どんなに苦しめられ、半殺しにされたか。夜になって薄ッべらい布団に包まってから、家のことを思い出して、よく私たちは泣きました。ここに集っているどの雑夫にも聞いてみて下さい。一晩だって泣かない人はいないのです。そしてまた一人だって、身体に生きズのないものはいないのです。もう、こんな事が三日も続けば、キット死んでしまう人もいます。

ちょっとでも金のある家（うち）ならば、まだ学校に行けて、無邪気にすすむん遊んでいれる年頃の私たちは、こんなに遠く... ..（声がかすれる。吃り出す。抑（おさ）えられたように静かになった。）しかし、もういいんです。大丈夫です。大人の人に助けて貰って、私たちは憎い憎い、

彼奴（あいつ）らに仕返えししてやる事が出来るのです... ..。」

それは嵐のような拍手を惹（ひ）き起した。手を夢中にたたきながら、眼尻を太い指先きで、ソツと拭っている中年過ぎた漁夫がいた。

学生や、吃りは、皆の名前をかいた誓約書を廻して、捺印（なついん）を貰って歩いた。

学生二人、吃り、威張んな、芝浦、火夫三名、水夫三名が、「要求条項」と「誓約書」を持って、船長室に出掛けること、その時には表で示威運動をすることが決った。陸の場合のように、住所がチリチリバラバラになっていないこと、それに下地が充分にあったことが、スラスラと運ばせた。ウソのように、スラスラ纏（まとま）った。

「おかしいな、何んだって、あの鬼顔出さないんだべ。」

「やっきになって、得意のピストルでも打つかと思ってたどもな。」

三百人は吃りの音頭（おんど）で、一斉に「ストライキ万歳」を三度叫んだ。学生が「監督の野郎、この声聞いて震えてるだろう！」と笑った。

船長室へ押しかけた。

監督は片手にピストルを持ったまま、代表を迎えた。

船長、雑夫長、工場代表... ..などが、今までたしかに何か相談をしていたらしいことがハッキリ分るそのままの恰好で、迎えた。監督は落付いていた。

入ってゆくと、

「やったな。」とニヤニヤ笑った。

外では、三百人が重なり合って、大声をあげ、ドタ、ドタ足踏みをしていた。監督は「うるさい奴だ！」とひくい声でいった。が、それらには気にもかけない様子だった代表が興奮していうのを一通りきいてから、「要求条項」と、三百人の「誓約書」を形式的にチラチラ見ると、「後悔しないか。」と、拍子抜けのするほど、ゆっくりいった。

「馬鹿野郎ッ！」と吃りがいきなり監督の鼻ッ面を殴りつけるように怒鳴った。

「そうかい。後悔しないんだな。」

そういつて、それからちょっと調子をかえた。

「じゃ、聞け。いいか。明日の朝にならないうちに、色よい返事をしてやるから。」 だが、

いうより早かった、芝浦が監督のピストルをタタキ落すと、拳骨(げんこつ)で頬(ほお)をなぐりつけた。監督がハッと思っ、顔を押えた瞬間、吃りがキノコのような円椅子で横なぐりに足をさらった。監督の身体はテーブルに引っかかって、他愛なく横倒れになった。その上に四本の足を空にして、テーブルがひっくりかえって行った。

「色よい返事だ？ この野郎、フザけるな！
生命にかけての問題だんだ！」

芝浦は巾(はば)の広い肩をけわしく動かした。水夫、火夫、学生が二人をとめた。船長室の窓が凄(すご)い昔を立てて壊(こわ)れた。その瞬間、「殺しちまい！」「打(ぶ)ッ殺せ！」「のせ！

のしちまえ！」外からの叫び声が急に大きくなって、ハッキリ聞えてきた。何時の間にか、船長や雑夫長や工場代表が室の片隅の方へ固まり合って棒杭のようにつつ立っていた。顔の色がなかった。

ドアを壊して、漁夫や、水、火夫が雪崩(なだ)れ込んできた。

昼過ぎから、海は大嵐になった。そして夕方近くになって、だんだん静かになった。

「監督をたたきのめす！」そんなことがどうして出来るもんか、そう思っていた。ところが！自分たちの「手」でそれをやってのけたのだ。普段（ふだん）おどかし看板にしていたピストルさえ打てなかったではないか。皆はウキウキと噪（はしゃ）いでいた。代表たちは頭を集めて、これからの色々な対策を相談した。「色よい返事」が来なかったら、「覚えてろ！」と思った。

薄暗くなった頃だった。ハッチの人口で、見張りをしていた漁夫が、駆逐艦がやってきたのを見た。周章（あわ）てて「糞壺」に馳（か）け込んだ。

「しまったッ！！」学生の一人がバネのようにはね上った。見る見る顔の色が変わった。

「感違いするなよ。」吃りが笑い出した。「この、俺たちの状態や立場、それに要求などを、士官たちに詳（くわ）しく説明して援助をうけたら、かえってこのストライキは有利に解決がつく。分りきったことだ。」

外のものも、「それアそうだ。」と同意した。

「我帝国の軍艦だ。俺たち国民の味方だろう。」

「いや、いや...」学生は手を振った。よほど

のショックを受けたらしく、唇を震(ふる)わせている。言葉が吃(ども)った。

「国民の味方だって？ …… いやいや ……。」

「馬鹿な！ 国民の味方でない帝国の軍艦、そんな理窟なんてあるはずがあるか！？」

「駆逐艦が来た！」 「駆逐艦が来た！」という興奮が学生の言葉を無理矢理にもみ潰(つぶ)してしまった。

皆はドヤドヤと「糞壺」から甲板にかけ上った。そして声を揃(そろ)えていきなり、「帝国軍艦万歳」を叫んだ。

タラップの昇降口には、顔と手にホータイをした監督や船長と向い合って、吃り、芝浦、威張んな、学生、水、火夫らが立った。薄暗いので、ハッキリ分らなかったが、駆逐艦からは三艘(そう)汽艇が出た。それが横付けになった。十五、六人の水兵が一杯つまっていた。それが一度にタラップを上ってきた。

呀(あ)ッ！ 着剣(つけけん)をしているではないか！ そして帽子の顎紐(あごひも)をかけている！

「しまった！」 そう心の中で叫んだのは、吃り

だった。

次の汽艇からも十五、六人。その次の汽艇からも、やっぱり銃の先きに、着剣した、顎紐をかけた水兵！ それらは海賊船にでも躍（おど）り込むように、ドカドカッと上ってくると、漁夫や水、火夫を取り囲んでしまった。

「しまった！ 畜生やりやがったな！」

芝浦も、水、火夫の代表も初めて叫んだ。

「ざま、見やがれ！」 監督だった。ストライキになってからの、監督の不思議な態度が初めて分った。だが、遅かった。

「有無」をいわせない。「不屈者（ふとどきもの）」「不忠者」「露助の真似する売国奴」そう罵倒（ばとう）されて代表の九人が銃剣を擬（ぎ）されたまま、駆逐艦に護送されてしまった。それはワケが分らず、ぼんやり見とれている、その短い間だった。全く有無をいわせなかった。一枚の新聞紙が燃えてしまうのを見ているより、他愛なかった。

簡単に「片付いてしまった」。

「俺たちには、俺たちしか、味方が無（ね）えんだな。始めて分った。」

「帝国軍艦だなんて、大きな事をいって大
金持の手先でねえか、国民の味方？おかしいや、
糞喰（くそくら）えだ！」

水兵たちは万一を考えて、三日船にいた。その
間中、上官連は、毎晩サロンで、監督たちと一緒に
酔払っていた。「そんなものさ。」

いくら漁夫たちでも、今度という今度こそ、
「誰が敵」であるか、そしてそれらが（全く意外
にも！）どういう風に、お互が繋（つな）がり合
っているか、ということが身をもって知らされた。

毎年の例で、漁期が終りそうになると、蟹缶詰
の「献上品」を作ることになっていた。

しかし「乱暴にも」何時でも、別に齋戒沐浴
（さいかいもくよく）して作るわけでもなかった。
そのたびに、漁夫たちは監督をひどい事をするも
のだ、と思って来た。だが、今度は異（ちが）
ってしまっていた。

「俺たちの本当の血と肉を搾（しぼ）り上げて
作るものだ。フン、さぞうめえこったろ。食って
しまったから、腹痛でも起さねばいいさ。」

皆そんな気持で作った。

「石ころでも入れておけ！ かまうもん

か！」

「俺達には、俺達しか味方が無えんだ」

それは今では、皆の心の底の方へ、底の方へ、と深く入り込んで行った。「今に見ろ！」

しかし「今に見ろ」を百遍（ひゃっぺん）繰（く）りかえして、それが何になるか。ストライキが惨（みじ）めに敗れてから、仕事は「畜生、思い知ったか」とばかりに、過酷になった。それは今までの過酷にもう一つ更に加えられた監督の復讐的（ふっきゅうてき）な過酷さだった。限度というものの一番極端を越えていた。今ではもう堪え難いところまで行っていた。

「間違っていた。ああやって、九人なら九人という人間を、表に出すんでなかった。まるで、俺たちの急所はここだ、と知らせてやっているようなものではないか。俺たち全部は、全部が一緒になったという風にやらなければならなかったのだ。そしたら監督だって、駆逐艦に無電は打てなかったろう。まさか、俺たち全部を引き渡してしまうなんて事、出来ないからな。仕事が、出来なくなるもの。」

「そうだな。」

「そうだよ。今度こそ、このまま仕事していたんじゃ、俺たち本当に殺れるよ。犠牲者(ぎせいしゃ)を出さないように全部で、一緒にサボルことだ。この前と同じ手で。吃りがいったでないか、何より力を合わせることだって。それに力を合わせたらどんなことが出来たか、ということも分っているはずだ。」

「それでもし駆逐艦を呼んだら、皆でこの時こそ力を合わせて、一人も残らず引渡されよう！その方がかえって助かるんだ。」

「んかも知らない。しかし考えてみれば、そんなことになったら、監督が第一周章(あわ)てるよ、会社の手前。代りを函館から取り寄せるのには遅すぎるし、出来高だって問題にならないほど少いし。... ..うまくやったら、これア案外大丈夫だど。」

「大丈夫だよ。それに不思議に誰だって、ビクビクしていないしな。皆、畜生ッて気ている。」

「本当のこといえば、そんな先の成算なんて、どうでもいいんだ。 - 死ぬか、生きるか、だからな。」

「ん、もう一回だ！」

そして、彼らは、立ち上った。　　　　　、　、　、　、
もう一度！

附　　記

この後のことについて、二、三付け加えて置こう。

イ、二度目の、完全な「サボ」は、マンマと成功したということ。「まさか」と思っていた、面喰（くら）った監督は、夢中になって無電室にかけ込んだが、ドアの前で立ち往生してしまったこと、どうしていいか分からなくなって。

ロ、漁期が終って、函館へ帰港したとき、「サボ」をやったりストライキをやった船は、博光丸だけではなかったこと。二、三の船から「赤化宣伝」のパンフレットが出たこと。

ハ、それから監督や雑夫長らが、漁期中にストライキの如き不祥事を惹起（ひきおこ）させ、製品高に多大の影響を与えたという理由のもとに、会社があつた忠実な犬を「無慈悲」に涙銭一文くれず、（漁夫たちよりも惨めに首を切ってしまったということ。面白いことは、「あ　あ、口惜（くや）しかつた！　俺ア今まで、畜生、だまされて

いた！」と、あの監督が叫んだということ。そして、「組織」「闘争」この初めて知った偉大な経験を担（にな）って、漁夫、年若い雑夫らが、警察の門から色々な労働の層へ、それぞれ入り込んで行ったということ。

この一篇は、「殖民地に於ける資本主義侵入史」の一頁である。

(一九二九・三・三〇)

本文は『小林多喜二全集』第二巻（新日本出版社 1982年）を底本に、一部表記を改めました。また、現在では不適切な表現もあるものの、歴史的な表現として採用していることをおことわりいたします。